



今古
實錄

夕霧廓文章

全

091518-000-4

特8-732

夕霧廓文章 (今古實錄)

榮泉社

M18

DBN-2507

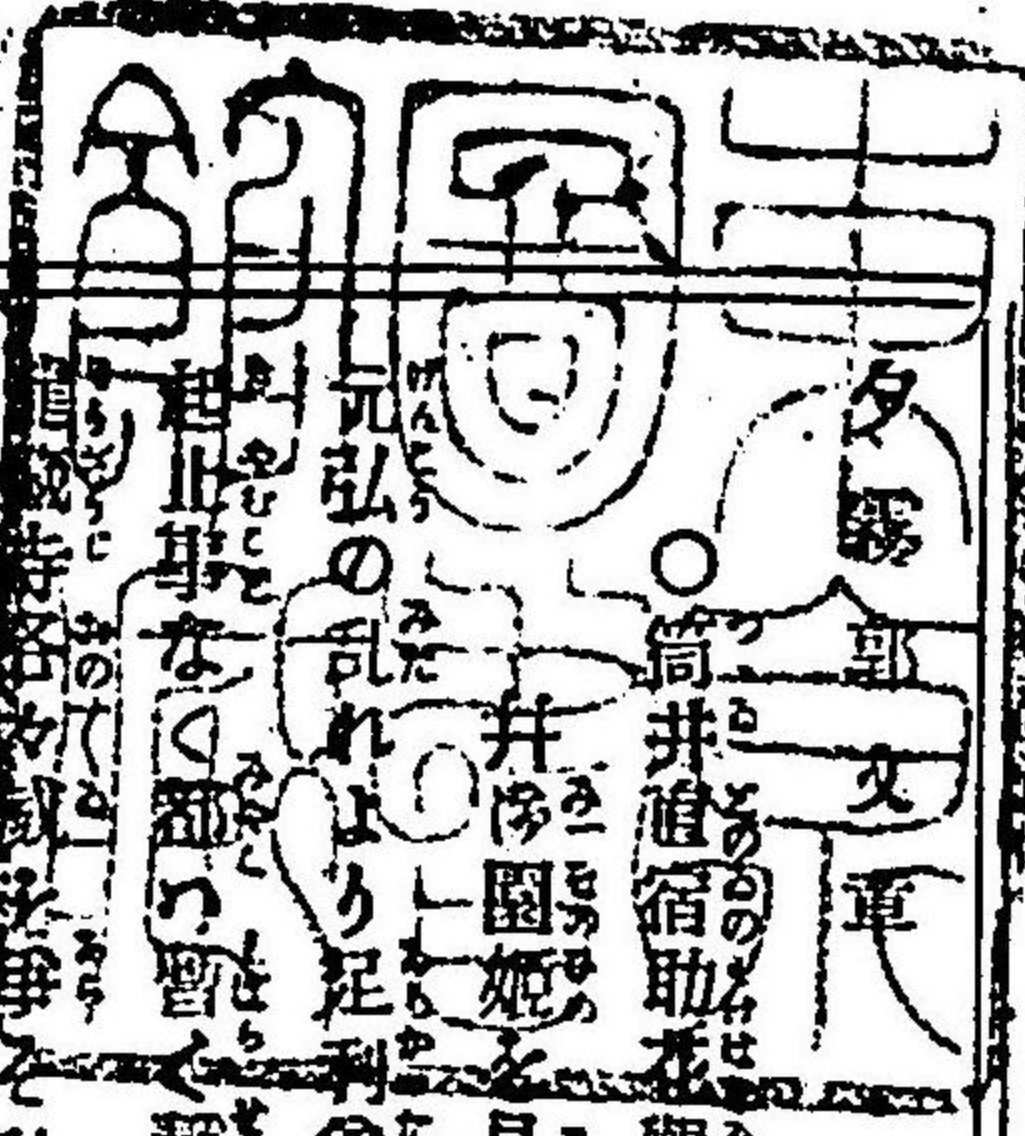


夕霧廊文章目録

- 筒井宿直之助花親遊興の事并伊園姫を見初る事
- 伊左衛門源八よ寄て媒妁を頼む事
- 宿直之助伊左衛門の異見を任て媒妁となる事
- 并伊左衛門花の井内祝言の事
- 鷲塚荒五郎宿直之助の婚姻を妨んと請る事
- 三上山歌仙の色紙を盗む事
- 櫻井中納言伊豆國へ遠流の事
- 并櫻井右京之進源八が住家へ到る事
- 源八花の井が書状を以て藤屋方へ到る事
- 并藤屋方家長偽状をもつて源八を欺く事
- 鷲塚荒五郎宿直之助を謀る事
- 筒井宿直之助癩病によつて仁圭親子の義を絶事
- 花の井源八が住居よて男子出産の事
- 并身を賣て主人を救へんと乞ふ事
- 花の井浪花新町よ身を賣事
- 伊園姫危難日金の地獄尊靈験の事
- 中納言殿親子對面之事

并伊園姫の孝心より父の病本復の事

- 花の井夕霧と改め伊左衛門の逢事
- 夕霧伊左衛門身の上を請る事
- 源八角力取と成雷電と名乗事
- 并藤屋伊左衛門居續して放蕩よ成事
- 鷲塚荒五郎夕霧を無想する事
- 并伊左衛門勘當を受る事
- 源八が母難小兒を連て浪花へ到る事
- 夕霧伊太郎が黄金を與ふる事
- 并三上山老姥を殺す事
- 阿波大壺伊太郎を賣て夕霧を口説事
- 油揚げ地獄の由來
- 鷲塚荒五郎勘當を受角力取と成事
- 筒井宿直之助伊左衛門の出會事
- 伊園姫探を立る事并宿直之助癩疾平愈の事
- 八十嶋吉平伊豆へ赴く事
- 中納言殿伊園宿直之助伊園姫婚姻の事
- 夕霧廊文章目録畢



筒井宿直助花親遊興の事

并伊園姫を見初る事

河内の國守筒井伊勢守と云ふ人おのしけるが世々將軍
 又隨ひ忠勤無二の者なれば君の伊勢も目出度且子息直
 宿之助の十七歳なれども絶世の美男よて縁の前髪いと氣
 高く面は美玉の如く一度此小童を見て心を動かさる人お
 さはどなれば將軍義輝公殊も伊園愛ありて韓雲孟龍の伊
 契り濁りらず出頭並ぶ者もなく爰又浪花の富家藤屋伊
 左衛門と云へる者有筒井家の館入りよて諸事を賄ひける
 よつよて金銀も不足なれば衣服大小の美目を驚らす事
 どもなり此藤屋伊左衛門の去ぬる秋の頃亡り後家にて
 悴伊太郎十七歳なるを元服させ伊左衛門と号らせ諸事家

管の事へ家長忠左衛門お任せ自分へ花美を好み茶湯香道

をのみ樂み是も浪花よ稀なる美男なりければ心お思ふ
 やう世お類ひあり美女を妻よせんとは是のみ佛神お祈り居
 けるが此程上京して筒井宿直之助殿へ機嫌を伺ひける
 お能てそ來たれ頃彌生の初め都の花も今暫くせば盛な
 るべし逗留して櫻狩せよ我も將軍の暇を願ひて名所の花
 を尋ねんと切に留らるれば伊左衛門も風流なる男おれべ
 心浮れ何れ伊勢よ隨ひ奉つらんと暫く逗留して在けるゆ
 る宿直之助の將軍櫻狩の事と聞ひければ義輝公笑ひせ
 給ひこの風流の願ひなり都の花を残りなく見てこよと許
 し給へば直宿之助難有しと伊勢中上夫より藤屋伊左衛門
 よ若黨一人仲間一人よ行厨を持せ祇園清水邊りの花を見
 廻り黒谷の邊りまで浮れ歩行しけ日も早暮昏なれば其日
 の歸館あり翌日の伊室より清瀬嵐山の邊りを詠めんと朝
 疾より小筒提重など用意して伊室に到り風景能所よ幕打
 廻し花の宴を始りける此方の櫻の木蔭お是も幕打廻し琴

の音聲最優美く梁の塵も拂ふ計りの妙聲よて「春の彌生の曙も四方の山邊を詠れバ花盛りもえら雲の懸らぬ峯こそなりける」と慈鎖の作の今様を詠ふ聲誠は迦陵頻伽も是より争で及ぶべきと直宿之助も暫く物を云で聞とれし然もて如何成人を心憎し伊左衛門見て參れどありける小畏つて其方の幕より立寄便りを求めて聞んと其邊りを逍遙する一人の大男下戸と見えて酒も堪ず幕の外へ立出るを伊左衛門近く立寄り是の如何成伊方の伊遊覽といやと問ければ彼大男會釋して是の櫻井中納言殿の息女伊園姫と申すていけ花見に參られしなり伊尋ねい其元方の貴紳さ方々と見受け伊明しいへと云ふ然もてなたの大和河内の大主筒井伊勢守の子息よてい扱々今日の麗りよて一入の伊戀みいひんと互ひよ心易く若芝打敷物語る中源八の何處へ行しや早く來れと幕押明て出る人を見れば年の頃ハ十五六と見えて窈窕たる粧ひの輝妍なる美女なりしり伊左衛門の一目見るより魂天外へ飛

忙然として現心よ詠め居たり此方の婦人も伊左衛門を見て憎らぬ風情もて尻目お見つ、源八早く來れと云ひ捨て幕の中に入りければ伊左衛門の彌々心浮れ早くも此方の幕の中へ歸り先程の琴の音ハ櫻井中納言殿の伊息女伊園姫と申す承まこりいと上れば直宿之助も愈々心とさめさて其姫の姿を一目見まほし如何してり能うらんと早戀々の情満面よ顯れければ伊左衛門も最前の娘お深く執心われバ何とぞいたし彼の姫を伊覽お入れいんと云つ、幕を立出先物語りし大男出でよりしと又々其わたりを立廻るお彼男短冊を持立出てりなた此方と見廻しより能枝よ付けるを見て伊左衛門の走り寄り卒爾の事おいへ共其伊短冊ハ姫君の遊ばされし伊詠歌おやと問ひければ大男答へていや然やうふていひハす最前幕外へ下郎を尋ねよ出られし櫻井殿の雜所桃井右京之進の娘花の井といふ人の詠歌よて則ち下郎が主人よてい最前伊園の通り器量もよく又手跡も見事よいハすやと少し主人を

自慢の心よて短冊を見するよ伊左衛門いと心浮れ付たる短冊を見るお

淺うらす思ひよめても花ならぬ
心の色ハと人おなし

と花よ寄て戀の心もあれバ扱ハ最前の尻目遣ひハ某しよ心あるよや男の情ハかくあるものよと思ふ折りら幕の内よ多くの女中の聲して只今花井の、短冊ハ伊前様へ伊覽お入れもせず花よ付る事やある源八早く其短冊を伊前へ持來られよと云ふ花井の聲として取しき腰折争で伊前の伊覽お入れぬゆるし給へど我を忘れて幕の外へ駈出で短冊を取んとするよ姫君の聲と思しく花井よ其短冊とらすな早く持來れと宣ふうち多くの女中ばらくと幕の外へ駈出短冊を取んとするお大男の結び付し短冊なれば女の手の届くべくもあらずあれよあれよと右往左往よ奪ひとらん取られじとせり合けるゆゑ姫君も思はず幕の外へ出給へバ彼大男の恐れありと方へよ平伏す直宿之助

此ハ詠折なりとてなたの幕より出て見給ふよ其姿誠お此世の人とも思れず唐土の楊貴妃西施といふとも争で此人は増るべきと思はず近くと歩行より給へバ姫もゆくりなく貞と見合せ給ふよ當時都廣しといへとも此直宿之助よ並人なき男よりあれバ姫も目せせず打詠めあら美しの少年やと互ひ思ひ初しこと深き縁しの始めなりと後よぞ思ひしられける附隨ハ婢女も、思はず直宿之助お見とれ短冊の事ハ餘所よなし目引袖引咄さ合けるカ彼の幕のうちより聲して姫君としたなく幕外へ出給ふ事なうれ早く伊入りあれといふ聲ハ是誰ならん花井が父桃井右京之進なり此詞よ驚き皆々幕の中へ入りけるお直宿之助伊左衛門ハ掌中の珠を龍宮へ取れしおも、ちおて忙然とイみけるが直宿之助伊左衛門よいへらく汝いりよもして櫻井家よ云ひ入れ彼姫を我婦妻よ貰ひ與よ此婦人ならでハ一生外の女よハまみゆまじと思ひ込だる跡なれば伊左衛門も彼花井よ深く執心しければ伊心易うれ君ハ

大和河内の大守なれば櫻井家の狸君とならんや等て違背
あるべき先々今日ハ浮路館あれと餘波おしげよ暮の中を
見入りて黄昏ころは歸りける

○伊左衛門源八は寄て媒酌を頼む事

扱も藤屋伊左衛門ハ浮室の櫻狩り花の井を見初しより
隙目先立添て忘るゝ隙もなうりける直宿之助殿も同
しく浮園姫も戀てがれて寝食をも忘れ給ひ早く媒酌をせ
よと切又責給ひけれハ伊左衛門つくく思ふよ今櫻井家
またよるべき通傳とてもあらずいりせやと心を碎し
が花見の折うち詞をうけし大男ハ雜所桃井家の家來とい
ひしの僕伴なり是も便りて先我戀の媒酌を頼み若殿の婚
姻ハ此手より取持さば必ず成就すべしと日々櫻井家の門
前を窺ひしる彼大男源八ハ所用ありて門前へ出づるを伊
左衛門呼び留めて足下ハ見忘れ給ふ先日浮室の花見よ
面會せしものなり少し足下ハ逢頼みたき事ありて日々此
あたりを徘徊せしよ幸ひの折うちなり浮路のどらすまじ

少しの間我ハ隨ひ此方へ來たられよといふ源八も如何
成事ハ知らねども然らば浮供中さんといひけるおぞ
伊左衛門ハ源八を近きあたりの酒屋お伴ひ酒肴を出させ
櫻應しけるゆる源八一圓合点ゆりす足下斯酒肴を出だし
某しを櫻應し給ふいれなし早く浮頼みの一條を承まハ
りて其後浮馳走も預らんと辭退して酒をさへ吞ねハ伊
左衛門聲を潜め嘸々浮不審と思すらん某し事ハ浪花よて
少しハ人も知りたる藤屋伊左衛門とナ者なり先頃浮室よ
て浮咄しヤせし筒井家の若殿其浮殿の姫君を見初給ひ何
とぞ嫁君ハ賞ひたき願ひなり表立ての媒酌ハ當時京家の
仁木細川の人々よても頼むべきなれども内分よて中納言
權浮承引の上よて縁邊の沙汰お及び度幸ひ足下ハ執權桃
井右京之進殿の浮家來なるよし浮咄ハ付内分の事を浮頼
みハ度夫ゆる日々貴公を相待しと語りけれハ大男大いよ
驚き是ハ思ひも寄ぬ事なり勿々内分たりとも下郎如き
の中出そべき事よあらず其儘ハ眞平ハ免下さるべしと受

引ねハ伊左衛門重ねて縁の事ハ宿世の縁しなれば勿々人
力の及ぶ事よあらず只々足下の主君へハ咄し下さるゝま
での事よて強ち足下の媒酌と申よてハななくいと事を分て
頼みけれハ主人ハ咄す事ハいと易き事ながら下郎の詞を
争で主人ハ取用ひやべきやといひけれハ伊左衛門聲を密
めて實ハ足下を浮頼みたきとハ先日右京之進殿の浮息
女を取らし事ながら某し不計見初てより戀の病ハ伏
沈むむりうよハ右京之進殿の浮息女を町人風情の伊左衛
門ハ嫁妻中受ん事ハ思ひも寄ぬ儀おハへどもせめてハ
我心の誠を浮息女ハ浮傳へ下されなば生々世々の浮恩と
眞實満面ハ顯ハれて云けれハ源八も其偽りならざるを察
しけん誠ハ戀ハ心の外とやらん承まこりハ町人風情と仰
せられハへども當時浪花よて一二を争ふ家諸國までも
響き渡りし浮名家小身の右京之進なご登君ハ過もの
よハへども實ハ息女ハ浮賞ひなるゝ思し召ならハ下郎
主人ハいりやうとも執成やべけれハ足下の兩親を始め親

類なごの思わくも如何なりと云けれハ伊左衛門彌よ悦び
此儀承知下さらハ國元の母親類たりとも節目正しき桃
井殿の息女いりて違背致すべし其段ハ某し受合はといふ
お源八も悦び然らハ歸りて主人ハ其段中聞せ明日よても
浮返事ハべし浮住所ハ何國ハおハしハみやと問ひけれハ
伊左衛門ハ悦び筒井家の屋敷よて藤屋伊左衛門と浮尋ね
下されハへども夫より互ハ酒酌交し双方へこそ別れける
○宿直之助伊左衛門の異見に任せ媒酌となる事
并伊左衛門花の井内祝言の事
伊左衛門ハいち早く筒井の屋敷お歸りけれハ宿直之助殿
待りけ首尾ハ如何ぞと尋給ふよ伊左衛門聲をひそめ幸ひ
今日先日の下郎ハ出會浮婚姻の事ハ出しけるよ此下郎存
の外義強き者よて櫻井家筒井家の浮縁談勿々下郎ハ口先
よ中も恐れありと受引すいゆえ手を替斯様ハよ中相頼
みハ所夫ハ似合の浮縁談随分浮世話ハべしとやうハ聞
入國元の母親類の事よても念を入れて尋いゆえ某し受合

母親類まで否と言ん涙花へ引取り双方の支度延引せん先々急お内祝言なして安堵せよと言捨て其徳を押し立てけり源八ハ只夢の心地して直宿之助殿の容貌言語の爽やかなるお恐れ入てありしが漸く人心地付て大に悦びかく筒井家の若殿は媒酌あるとハ世に稀なる事なり中納言殿の雑所如きの本望此上やあるべき内祝言の事ハ近々下郎ヶ計ひやさんと勇み進んで立歸り右京之進は斯と語り且筒井の若殿直宿之助殿の世に希なる器量を稱しあわれ中納言様の姫君は縁談あらば此上もなき事と事お擬て述けれバ右京之進ハ悦び勝を町人あれども諸國に聞えし藤屋伊左衛門其上筒井の若殿媒酌下さるとハ此上やあるべき中納言殿にも此趣さ相願早々内祝言させんと中納言資吉卿の浮前ふ出娘花の井涙花の町人藤屋伊左衛門とや者お縁談任つり度旨や上けれバ中納言殿も兼て聞及び給ふ伊左衛門なれば宜しき事と思し召殊々筒井家の若殿媒酌とハ無大慮なるべし然るハ筒井の屋敷ハ勸番屋敷なれば女

一人も有ざれば内祝言の事ハ丸山端の寮にて然るべしとお差附ありけるより其趣きを筒井家へ申遣ひしけるよど然ればとて結納目を宛らす計ハ積重ね筒井家の近習正木主膳を右京之進方へ遣はされける分て源八ハハ格別の骨折とて黄金十枚遣ひしけれバ源八殿を遣し争で此大金を受納致すべきと種々辭退すと雖も使者是を免さず右京之進も受納むべき旨やされけるゆゑ頂戴して千本お付け一人の母お見せ悦むせアんと悦べる事限りなし夫より丸山端の寮にて内祝言の式あるしとて事極りけれバ直宿之助殿より又々正木主膳を授應の役人となし遣しける右京之進ハ娘花の井を召つれ源八殿とも入來れば藤屋伊左衛門爰を嚙と着飾り出向ひけるハ娘花の井も源八の櫻狩りお見初し美男なれば心嬉しく互ハ親子夫婦の盃を取交しける其時伊左衛門右京之進ハ向ひ斯親子となり侍るも深き因縁にて侍らん夫ハ付身殿親み入皮仔細ハ筒井の若殿去ぬる源八の花見の折ら櫻井家の姫君を見初

給ひ何卒嫁君もや受度願ひあり當是將軍家の浮遊えもめでたき直宿之助殿なれば表立ての媒酌ハ細川家或ハ仁木なせは望み次第なりやべし内證の所を何分は執成頼み奉つるとのべけれバ右京之進打點き先も其噂聞さるもあらず大和河内の大守を聲とし給ふハ主人も満足ならん此事ハ某し宜しく計ふべしと受引て源八を殘し其身ハ歸りける伊左衛門ハ斯思ふ儘なる事此上やあるべきと聞中入て花の井ハ對面し頃日よりの戀々の情を述べけれバ花の井も恥ろしく良赤らめて自らも君を見初て靜心なく櫻み短冊を附しを君の見給ふ時の嬉しさ夫より姫君の短冊をどれよと宣ひて幕の外へ出給ふも筒井家と深き縁しむや侍らん此心を必ず替り給ふなど互ハ千代八千代と語らひけるお情知鳥の鳴音も源八早くも起出て伊左衛門様は歸坂ハハ早速迎ひの興を登せ給ふべし先夫までハ暫くの間なれば早々歸りては姫君も筒井家浮遊入を勧め給ふと忠義ハハいと俱と崩ゆるに名残り盡せ

ねども漸々として花の井ハ驚ハ打乗歸りけれバ伊左衛門ハ筒井の屋敷に歸り夕よりの始末を語り櫻井家浮遊の事身右京之進お申へハ大に悦び俱々中納言殿へ御申へさよし申歸り上ハ心易く思出し下さるべしと云ふ直宿之助殿も悦び給ひ然らば内々將軍へも申上表向より言入べしと悦び給へバ伊左衛門ハ不思議の事にて涙花へも言やらず妻を求めけるハ此末如何なりけん下回をよみ得て知るべし

○懸塚荒五郎直宿之助の婚姻を妨んと計る事
 桃井右京之進ハ邸へ立歸り櫻井殿の浮前ハ出娘の内祝言の濟し事を申上且伊左衛門ハ言し直宿之助殿姫君婚姻の事を申出し筒井家ハ和州河州兩國の大守殊ハ直宿之助殿將軍の浮遊愛護うらねハ誠願ふてもなきは縁談と存じ奉つると言けれバ中納言殿如何も汝が如く我等が聲ハハ過たる家柄なれば爰ハ一ツ難義の事あり去年より阿波の大守懸塚大膳の一人荒五郎といふ人より娘所望の上

し度々言入るれども彼荒五郎の身持宜しうらす傾城の心を寄殊更心奸佞よしして放蕩不顧の男と聞ゆるゆゑ有無の返事もなさず捨置たり此事のみ心お懸るとありければ右京之進打笑ひ假令伊約束いども結納を取されば世の中約東變替常の如くと承知る矧や有無の返答あきま於ての心易し筒井家へ縁談相整ひ以上の残念ながら断りすと一通り仰せられ事濟儀といと心易く受合ければ中納言殿も安堵し給ひ某し近頃痼癩の病にて歩行自由ならせ給ふ内さへせざれば汝諸事を計ふべしと右京之進も任せ給ふ扱又花の井の不思議の縁にして思ふ男と婚禮して心お嬉しくいち早く姫の伊前へ出れば姫婢女ども夕の囁々嬉しうらんあやうり者としてんで寄るひ耳を引もめり様もありければ花の井の取巧しくも又嬉しく姫君も直宿之助様伊婚禮の事親右京之進受合ひ上へ定めて近きよ伊興入あらん都廣しと雖も直宿様も増器量ひなまよし姫君こそあやうり物よといふよ姫も花見の折うら見給ふ美少年な

れバ心は嬉しく只良し紅葉し給ふ計なり抑々此姫君の母上産後空しくなり給ひ其後の中納言殿専夫住し暮し給ふ又花の井の母も産後死しけれ共右京之進後妻を迎へず暮しける故姫と花の井との兄弟の如く伊殿のみ居て成長せしなり爰に阿波の大守惣次郎大膳といへる人あり奸曲邪智よしして當時松永彈正お婿詰ひ其子荒五郎廣輔を在京させ將軍の伊近習たりし此荒五郎好色男よて在番の徒然九條の傾城お金銀を遣ひ捨其上大酒不節の愚漢なり櫻井中納言の息女お都お希なる器量と聞傳へ人を以て婚姻の事を言入けるお中納言殿其行跡の正しうらざるを悪んで有無の返答もせず打過給ふよ今度筒井家へ縁談あるよ付て右京之進の荒五郎を屋敷へ立越先達てより度々主君の姫君伊所望の伊使者も預ると雖も取柄れ伊返事さへ致さずし所此度筒井家より所望も付是へ差遣へす間餘儀なく伊断りやと言置て歸りければ荒五郎大お怒り憎き安公家哉去年より言入たる某しよ返答さへせず其上大和

河内兩國の太守たる筒井なれば某し提鏡へわの方へ遣す事言語同断なり此意恨晴さで置へさうと躍り上り怒りける然も得心の上變替といふも有す何と言やるへさ術もなければ獨り心を悩しけるが急度心よ一計を生じけるこそ恐しけれ荒五郎元來角力を好み力者を抱へ置けるが此者江州甲賀郡の産つて三上山百々右衛門といへる六尺有餘の角力取めて甲賀忍の家より出て忍術も達し角力も日本お隠なき力者よぞありける此百々右衛門を密に招き櫻井家より婚禮變替の事を憤はり是れお付汝も頼みたり一條あり斯様くよなし異なば一廉褒美せんと有ければ類を以て集る惡黨なれば二言と育す受合某し關取と尊敬せられ其術のうち捨いへども伊頼みとある上二度術を行ひ首尾致す事お我方すよ一世一度の曠業よいへば仕課いへ急度伊褒美下さるべしと詞をうたの其支度をぞなしにける

○三上山歌仙の色紙を盗む事

禮記お曰國家將亡亡びんとするどうの必ず妖孽有と宣成哉抑々此櫻井中納言の家系を尋ぬるよ大納言公任卿の末孫おて世々公任卿の遺ひ給ひし自家の三十六歌仙の色紙を所持し給ふ代々の天子叙覽あり分て後醍醐天皇櫻井家へ預け給ひ必ず伊位定まりて後醍醐あるよより櫻井の家おの重寶此上なき物なり頃の水無月初めつうた彼色紙虫干となし給ふよも自らはを守り怠慢なくはしけるが最早黃昏頃なれば悉皆く改め三十六葉を一ツよなし箱お納給ふ所よいつくより來りけん七尺計りの眞黒なる者庭の植込よりのさくど座敷お上り彼色紙の箱を奪ひ取又庭の方へ行んとする故中納言殿大お驚きこゝ曲物遊すまじと傍らなる太刀を引抜給へども痼癩よて迅速お立事叶へねば其太刀を投付給ひしお肩先おたと當り鮮血流るゝと雖も見返りもせず何國どもなく消失ければ中納言殿一大事を物おも來れど宣ふおや次お扣へし近習折節右京之進も詰合居ければ早速驅付此体を見て上と下へと返しけ

り心利たる右京之進退取刀ふて裏門へ駈行けるはや半町計り先へ六尺餘の男うけ行ゆゑ是なん曲者ならんと電光の如く追行しう形消てうせけるゆゑ其事と早速天聴み達しければ帝甚だ逆鱗まし／＼大切の寶なればこそ南帝都路の砌大切よせよと預給ひ加之ならず代々の帝御即位の砌櫻井家より敬覽ある舊格たるを容易に盜されしなご、ハ言語道斷不届なりと公卿詮議ありて中納言殿の館を青竹よて戸締一間所は押込嚴敷番をぞ附られける斯る事と知らず直宿之助殿の婚姻を取急んと將軍へ歸國を願ひ伊左衛門を召連大和へ歸り給ひて櫻井中納言殿の婚姻の事を父伊勢守殿に願ひければ伊勢守も大に悦び某し多病にして大國を治るゝ心勞せり直宿之助將軍の伊勢守も目出たく婚禮を願ふ事此上もなき悦びなり早く元服して汝を伊勢守となし我ハ法跡し仁主と名乗るべしと將軍家へ家督の願ひを出し櫻井中納言へ結納を持參するに青竹よて戸をメ勿々出入さへ叶へねば大和の使者仰天し

てあたり近き公卿へ立寄り細を聞か色紙紛失の事咎めなりとの事なれば惘れ果て隣國し右の趣きを述べれば直宿之助殿伊左衛門が驚き大方おろす如何せん相談するお父伊勢守のさあられぬ跡よて斯る罪人の糧を嫁よなしてハ家の名折結納を遣はさるゝことを返す／＼も大慶なれど目若としておひせバ直宿之助の只涙よ沈み更元服の心さしもなくおひしける故伊左衛門も一先京都へ立越勇右京之進の面會し事の實否をも尋んと云に斯る大變なれば容易門内へ入事もなるまじ様子分りて後立越と暫く我傍らお在て心をも慰めよ便おなすハ汝一人なりと免し給へねば伊左衛門も心ならず思へども若殿の心をも推量り暫く大和お逗留しける

○櫻井中納言伊豆國へ還流の事

井櫻井右京之進源八ヶ住家へ到る事

斯て櫻井中納言殿ハ大切の寶紛失せし咎により攝家公卿評議ありて伊豆國熱海へ還流に極り怪しの張興を昇荷ひ

檢非違使の官人中納言の館より來り谷の趣きを述引立れば伊園姫ハ只夢の心地して父の卿も取すぐり何逆遙々の所殊も歩行も不自由お渡らせ給ふ伊身を獨放ちて還參らせん自をも召連給へと正躰なく敷き給へハ官人も心有人よて左敷給ふな寶さへ尋出し給へ歸洛の疑ひなるべし此上の跡も残り右京之進と心を合せ寶を詮議なし給へ罪人の妻子を供して行法なけれバ供叶ひ侍らず品よより跡より來り給ふとも夫ハ公けの私しならん島守おも某し内々言聞せ知す顔おせよといはん此度の帝の逆鱗甚だしけれバ却て中納言殿の爲なるまじと事を分ていふお中納言殿も斯る災ひも逢も天のなせる事よて人力の及ぶべき事よあらずと右京之進を呼出し我不幸よして遠流の身となる事誰をり恨みん只姫が事を頼み入二ツハ色紙の盜賊を尋出し再び我家を起し吳よ返す／＼も短氣を出す事なりれど張興よ召るれば右京之進ハ張裂はうりの胸を押静め斯なる事誠に上へき詞なし併し跡の事必ず／＼伊

氣遣ひいまし分骨碎身して伊家再興を計すべし併し伊氣の我君是のみ心を痛いと言もあへず咽りへれば姫ハ猶更爭で父上計遣參らせんと狂氣の如く見え給へハ花の井猶女心の口跡おく姫君こそ伊供の叶はずとも切て奴家を召連られ伊介抱上たしと只管願と雖も官人聞入す其事の重て如何様ともなるべし心願くて叶ふまじと花の井を押のけ中納言を興よりさ乗伊豆を差てぞ急ける即刻退立の官人數多來り櫻井の屋敷を退拂けれバ右京之進泣々從者婢女どもも暇を遣し門外へ立出けるハ何國へ行んと途方お暮けるを源八ハ甲斐／＼しく下郎が母ハ在所千本通りよ幽お暮し先々是へ伊越へへと花の井ハ姫君の伊手を引右京之進も少しの風呂敷包を脊負強力の源八姫の調度までを引りたけ千本の母が方へ到れば母ハ且悦び且敷き能こそ尋下されし斯る事のあらざれば争で姫君の住荒たる宿へ來り給へんと眞實おつしづきける姫君ハ只管父の卿の歩行不自由を敷き給ひ配所へ立越介抱せ

んと頻に宣ふよぞ右京之進其孝心と感し俱々伊供さん
どの思へども即刻屋敷を追拂ひれし事なれば時へとも
あらず配所の伊不自由なやうに金子をも持参し伊介抱
せやと思へども是とて心よ任せず是のみ心を痛けれ
ば花の井いひけるの奴家浪花の藤屋伊左衛門殿と婚禮し
て未だ彼地へへ行ねども夫婦の約束なしたる上此節百
兩二百兩の事頼み遣ひもとも難み給ふまじ此頃伊左衛
門殿も若殿の伊供して大和へ行との女を残し給へば最早
浪花へ歸り給ふらん櫻井家の騒動をも知せ金の事をも頼
み遣ひさん如何と云ふ右京之進暫く沈吟してありけ
るが儘百兩心りの事を浪花一の豪家へ無心をいふ事口
惜殊よ其方披露も未だせざる事なれば如何あらんといふ
と源八聞もあへず夫の世よ有とさの事よハ斯の時節何
ぞ義理を立給ふ事やある某し花の井様の伊多を持行伊左
衛門様は面會して伊家の事を咄しなば百金二百金の事争
で還背し給ふべき伊多認め給へ某し立越配所の伊多心

の儘おなし参らせんと事なげし述べれば右京之進も口
惜どの思へども姫の頻に父上を慕ひ給ふよ許方なく娘よ
多を寄せ源八を浪花へ遣しける
○源八花の井が書状を以て藤屋方へ到る事
井藤屋家長偽状をもつて源八を欺く事
源八心せく儘伏見より船お打乗夜明の浪花へ着べしと
乗合の中へ入けるお先よ一人源八お劣らぬ大男打乗居
たりしが源八を熱々と見て足下ハ誠よ能男ふりなり角力
を取給ふやと尋ければ源八打笑ひ幼少より公家奉公仕つ
り力業の致さずいへども元來角力の好物よて少しハ心懸
やといふよ左あるべし某しハ浪花の角力取八十島吉平と
す者頃日迄京都ハ勘進角力ありて逗留いたし漸く今日國
元へ歸りハ扱々能男天晴天下の關取よなり給ふべし物の
相談おいけ公家奉公を止め向後角力取よなり給ひハ恐ら
く日本ハ大關となり給ひんと動るといへども源八ハ主家
の難儀よ心ひりれ能程よ待遇けるよ八十嶋ハ頻りよ源八

を胸め我所書を認め渡し必ず尋ね給へと咄しの中早
くも八軒屋といふ所へ船の付ければ己がさまぐら別れ
ける是より源八ハ藤屋伊左衛門を尋ぬるよ浪花一二の家
家なれば早速えれ門より其様子を窺ふよ聞しお増る家居
の結構なれば彌々心嬉しく店よ立寄京都櫻井家の雑所桃
井右京之進が家來源八と中者よてい伊主人伊左衛門様よ
伊對面伊咄し中度儀ありて参りい伊取次下さるべし則ち
嫁伊花の井殿よりの伊多よていと差出せ伊暫く伊待いへ
と言捨丁稚ハ多をもて奥入り此時伊左衛門ハ未だ大和
よ在て留守なれば家長忠左衛門母妙閑いひけるハ先日
伊左衛門様よりの伊状よ筒井家の若殿伊媒始よて櫻井家
の雑所桃井右京之進の娘花の井と内祝言せしよし歸り次
第吉日を撰び京都より呼向んどの事なれば此方よハ己
お椀屋久兵衛殿妹伊を嫁よ貰はん互よ似合の事なりとお
袋お兼て仰られしハ相談もなく内祝言有しとハ餘り諸親
類方を踏付よなされし事なりと評議いたし居ハ中へ最早

源八の井よりの女など、ハ扱々憎き致方なり先々多を開
て伊覽あるべしと母妙閑諸とも多を開くよ櫻井中納言殿
ハ伊豆國へ左遷屋敷ハ召上られ漸く家來源八ハ母の方よ
在よし姫君伊豆の國へ介抱お伊出あり度よし我父伊供し
て行んよも旅用且配所の賄ひとて有されハ金二百兩計
り伊貸下さるべし妾事ハ一日も早く其伊方へ参りたけれ
ば伊供よハはづれ伊迎ひを待暮そとの文轉おれば母家長
大よ驚さといけしからぬ事哉斯る家もなき人と嫁お貰ひ
て何りせん早く縁を切よハ如じと様々工夫を凝しけるが
忠左衛門不計心付旦那伊左衛門様留主こそ幸ハ此返事を
似せ筆よ認めあいををつりし重て此方へ便らざる様ハ仕
方こそあれと手代清八ハ旦那と一絡よ寺屋へ行旦那の手
跡よ寸分違ハねば是よ返事を書せやさんと家長案文して
手代清八ハ書せ家長忠左衛門其多を持出源八ハ對面して
其元ハ桃井家の伊家來とや旦那伊左衛門中さるハ京都
逗留の徒然お桃井の娘を慰みしなり争で嫁なきお貰はん

委細の返事に有との仰せなりと聞より源八仰天して夫の存じの外の事なり伊左衛門様眞實に下郎を浮頼み故此婚禮の事は付様々心を盡し取持しに能く存じの事何あもせよ伊左衛門様は浮目も懸り浮咄しやせ相分る事旦那を浮出し下されよと急い急いで言ければ忠左衛門嘲笑ひ此方の旦那の容易も其許方の如き下郎お逢人あらず早く歸り給へと聲荒らりに罵るも源八の只夢の心地して様々と伊左衛門は面會せん事を頼みけれども多くの手代も一同に終り源八を門外へ追出しけるゆゑ源八途方よ暮て居たりしがいや／＼伊左衛門殿表向婚儀なき事なれば家内を擲りて斯情なく言せ給ならんと道理を付てすく／＼と京都へ歸り浪花の始末を語り早く其返事を聞き見給へといふお花の井籠も開見ると伊左衛門の手跡もまされなけれは返事の文体を見るお京都逗留中の徒然と和女を思みしあり此方よ／＼腕組久兵衛といふ人の妹小吟といふ言なづけわれは争で公家侍士如きの娘を嫁よせん必ず／＼

思ひ切給へまして二百兩の大金を何ゆゑ借やさんや此後多おせ給るまじくいと書たればお花の井のノツと叫んで地へ倒れ暫し絶入有けるが懐劍抜持既に自害と見えければ人々大に驚き押し浮園姫のお花の井に絶り付やお花の井狂氣せしおや心を静めよと宣へお花の井は涙を拭ひつゝ斯る畜生の如き人とも知す幾千代りけて契りし事の恥しさを殊に頃日の我身只ならぬ心よて全く伊左衛門殿の種を懐妊しなれば早く嫁入して玉の如き子を産ませ様よ見せやと樂みし甲斐もなく何と世の人よ面を合すべき只此まよ／＼殺して給ひて泣叫びけるお右京の進も涙まくれ暫く沈吟してありけるが某しつく／＼と思ふよ只一度面會しつれ共伊左衛門が人物斯る不義を行ふ者よわらず是よ／＼深き仔細もあらん殊に此程源八が老母の介抱大勢の厄介を賄ひ呉るも皆伊左衛門が源八へ與へし黄金なり斯る不道の者何とて十枚の黄金を與へん必ず大死する事なりれと留られ少の心安まりて漸々死を止まりける

○驚塚荒五郎宿直之助を謀る事

驚塚荒五郎の櫻井中納言の婚姻變替を深く憤り三上山を語り公任の色紙を盗せ中納言家よ答あらんよ一年も立なば我尋ね出したる様よなし櫻井家よ恩を見せ再び姫を手に入ん中納言塾居の内争で筒井へ嫁入あらん此恩を見せ筒井家を斷り我方へ姫を迎んとす謀計なりしよ帝の逆驛甚だしく中納言の左遷姫の行衛なくなりけるお此も蜂も取すありけるが宿直之助は鼻明せしを切ても腹いせと思ひける斯て筒井家よ伊勢守仁主と名を改め入道して宿直之助は元服させ伊勢守となし上京させ將軍へ家督の浮禮中上させけるに宿直之助の心隙々として樂まず明窓姫の事のみを懸こられ此度の上京も伊左衛門を召つれ將軍家へ浮禮中上られしお義輝公は満足遊ばされ義の一字を給ひり伊勢守義雄と号しければ威勢彌々日々増りけるおゆ／＼しけれ同じ近習なから荒五郎の志し宜うらざれば將軍其外もうとみ取用ひされば又々筒井が浮前能を

憎む事日頃よ十倍して何とぞ彼をなき物おせんお様々工夫しけるが或日殿中よて筒井よ云けるお足下家督後波是して祝儀をもやさす今晚の幸ひ足下も某しも非番なれば鹿酒一献進上せん何とぞ來臨あれうしといふよ筒井の元來酒を嗜まされも朋輩の事辞みたく然らば今晚浮馳走お預らんと別れけるが宿直之助の屋敷に歸り斯々の事よて荒五郎方へ招りたれば汝も來れと伊左衛門お言ければ伊左衛門の只花の井の事のみ心懸り仰せ有難いへとも某しお櫻井家の姫君お右京の進の身の上何方お住居致すよや此程より尋たく存いへとも君の浮禮おのみ在て心底よ任せず今日お浮禮を給ひり姫君の在家を尋参らせんといふお宿直之助如何おも某しも心懸りたれ共公務お暇あらざれば其儘お過せしなり汝心を込て尋参るべしお宣へば畏まりいと伊左衛門の立出けるおお筒井の正木主膳と召連荒五郎の亭よ至れば荒五郎大お悦び能こそ來り給ひしと日頃よも似や酒肴を出し忠實よ響應ける然

とも宿直之助の下戸なれば亭主荒五郎のみ酒を呑今の木
 頼の躰めて座も乱るゝふ至り亭主荒五郎いひける筒井
 公の最前より一向は酒を呑給はず我のみ過して甚だ酩酊
 せり爰は美酒あり少し呑給へど硝子ふ入し酒を出しけれ
 ば宿直之助も餘り亭主の懇應をむげよせんも本意あらす
 と半盃盡お受て呑み其味美として誠は養老の美酒とも言
 つべし荒五郎今少しと云ひける故又半を呑けるや豈はう
 らん是癩疾を發する毒酒ならんとの知らざりける夜も更
 ければ主膳袖を引暇を乞給へと云ふ筒井も大に酩酊して
 又社参りいへんと禮謝して歸りける其日伊左衛門の閑暇
 を得て櫻井の門前ふ來り門内をさし覗くありしよも似
 せ草達々と生繁狐狸の伏所となり居けれと思はず落涙し
 て去りて右京之進の在家の何國あひすやらん斯様の
 時こそ尋て人の誠を顯す時節なりと邊り近き町家に入
 て事のやうを尋るお追立の官人參られ姫君右京之進殿諸
 とも立出給ふに見受侍れど夫より何國あひすといふ事

を知す近頃承まれば姫君右京之進殿親子とも伊豆の國
 へ起し給ふとの風聞なりと云ければ伊左衛門彌々力を落
 し孝心の姫君なれば左もあるべき事なり右京之進花の井
 も定めて伊俱して行し疑ひなし左ある時争都のうち
 おあらんと力を落して歸りける
 ○筒井宿直之助癩病あつて仁圭親子の義を絶事
 夫より筒井宿直之助の宿所を歸けるや何とやらん心地の
 しく翌日も出勤せずありけるは物身發斑を生じ極事しき
 りなれば是を撥し膿汁を出し顔色も悉皆く班ふなり
 種物の如くも出來三日の中お眉毛なども抜ければこの
 不思議の事なりとさまゝ療用を爲すと雖も更に腫なけ
 れば將軍へ訴へ古郷へ歸りけるは父仁圭も大に驚き是を
 見るよ全く癩病の速ひなければ仁圭歎息して我家代々癩
 を病ものあれば必ず親子親類まで義絶して街を捨るの例
 なり既に先祖後徳丸を合葬せしめ給へし例あり不便の思
 へども先例に任するごとと又元の宿直之助ふなし仁圭再び

伊勢入道と号し政事を治ける近習正木主膳の幼少より伊
 側ありて厚恩忘却をべきやと捨られし宿直之助は附隨
 へば藤屋伊左衛門も是までの厚恩報ずる爲浪花へ伊俱
 し諸醫お見せしめ争ては本服なき事いひまじひらるる浪
 花へ伊光臨下されよとさまゝ諫むれども宿直之助は唯
 涙を嘆びいやと我斯る悪疾を得る事誠は佛神の伊憎み
 と思へば誰をり恨みん家はより諸國の靈佛靈社に詣て少
 しも我罪の滅する様願はん命あらば重て逢へし主膳の
 我幼少よりの好みあれれば彼一人を召連んと伊左衛門種々
 といふと雖も更に入らず伊母富の方も頃日より歎き沈
 み給へ共家の格なれば詮方なく宿直之助望みの如く諸
 國修行して病氣平癒せば早く建歸り吳よと黄金百兩を主
 膳に渡しける父仁圭も流石恩愛の涙に吳居たりしが宿直
 之助の先是より西國願せんとありけるは伊左衛門も切
 て浪花迄の伊俱せんと三人旅の衣裳も脱りへ笠深々と打
 冠り主膳甲斐しく守護し立出れば雨親の歎き言も

更なり夫より大和河内の鹽場を札を定め浪花へ出給へ
 ば伊左衛門さまゝ留ると雖も藤屋への立寄給はず伊左
 衛門引別津の國惣持寺勝尾寺へ分登給ふと哀れなる是
 全く荒五郎の惡計を露給ふこそ是非もなき
 ○花の井源八が住居して男子出産の事
 井身を賣て主人を救へんと乞ふ事
 却説伊豆姫の一日も早く伊豆國へ行て父の聘の介抱せん
 と心計りの急給へども旅の用意すすべき金なければ心な
 らず源八が母の元あひする中花の井の月満て玉の如き
 男子を産けるや右京之進の不義の伊左衛門の種なれば水
 よなせよと様々いふと雖も花の井の受引を思ふ仔細のい
 へば是計の父上の仰を背き免し給へといふよ源八も俱々
 小産の誠を恐しき業なり大切の伊身お怪我ありて立難
 しと親子詞を辯へて止むるは右京之進も心遣ひの中は娘
 お過ちよても有れば此上の大事なりと終に安産したりける
 然ども伊左衛門源八お與へし黄金も次第もなくあり姫

れべいと心易しと夜明方よ宿を立出何心なく通りゆくを待伏したる四人をらく立出驚塚五郎殿の仰を受是まで附来りし者どもなり早々浮園姫を渡すべしとをらくと立懸り姫の浮手を引立れば右京之進嘲笑ひ驚塚殿は姫君何の用あらん全く己等の人買なんといふ盜賊ならん公家侍の手並を見よと刀引抜切て掛れば物ないはせそと四人も扱つれ火花を散して戦へも老功の右京之進二人も手紙を負せければ残り二人大驚き四途路も成りて逃出すを己等詞にも似ぬやつ原哉老人の手練を見よと追りけ行お姫の手を揚やよ右京之進長追せを早く歸れと宣ふ後より思ひも寄す六尺餘の大男顯れ出物をも云ず姫を小脇に抱き締めてやつたりと野道を横ざり沼津の方へ馳行よを姫の魂天外に飛只今殺さるゝよと思ひ給へば此時なりと六道能化の地藏尊斯る難儀を助給へくと心中に念じける然る所六尺計の大坊主衣の上より刀を横たへ大成柄杓をもち忽然と顯れ出三上山ヶ前立ふさぐ

りの大柄杓を差出し其姫を鉢へといふ三上山大驚き汝何者なれば此所へ出て邪魔をさす片寄るべしと怒ければ此大坊主大笑ひ是の日金山地藏堂建立の坊主なり其姫を寄進せよと云儘三上山ヶ手を取姫を引分れば百々右衛門怒り堪へぬ物をも云すむちやふり付を坊主も大力で見えて互おむすど紐暫くもみ合しや兩人細き畦を踏くづし深田の中へさるひ落上り成下り成いさみ合ける坊主の力を増りけん深田の中よて三上山を目より高くさし上沼の中へ異さうさまと投込たり姫の此僧の忍しさを猶更探々としておはしけるを彼僧近くたち寄必ず我と恐れ給ふな野僧の父の卿のおつ近所に住ものなり心易思し召父の卿は逢せ参らせんと姫を肩お引りけて飛が如く他所へ行けん影も形もなうりけり三上山の大力の坊主も投付られ負も體も泥まふれとなり漸々道より上りければ痛たへがたくつたへの流にて負を洗ひ暫く息をやすむる所へ四人の弟子ども各々湯手を負はうくの体よて逃

来り扱々達者の老人の中々手は合せず命うららみ遊参つたり關取の如何成れしやと尋れば三上山苦しげに我も姫を奪ひとりし何國より大坊主来り某しを泥の中へ投込み姫を奪ひ立退たり勿々姿美所よあらば此跡よての通し駕ならでい浪花への歸られまじ先沼津まで我手を引つれ行異よと四人の弟子の手を引れ漸々にして歩行けるこそ心地よき浮園姫の夢の心地しておしけるよ此大法師いたり参らせ必ず心を痛給ふな今宵の愚僧が庵よて一夜を明し給へ右京之進も必ず尋参りいへんと凡四里許歩行と思へば奇麗なる庵よ伴ひ則ち愚僧が草庵にては姫君嘸空腹よわすらんなれども愚僧今朝より託鉢よ出たれば飯さへ焚す是なりとも召上られ飢を凌ぎ給へと奇麗なる器よ小豆の餅を入茶を参らすれば姫のゆふべ三嶋よて地藏尊へあげたる餅と同じ餅なれば食りねて居たりしは此法師箸をもて切てひらお食給へと勧めけるゆゑ飢よ勞れ給へば少し食給ふお味ひ美なるゆゑ二ツ食し給ふよ

早服みちたり暫くまざるみ給へ我の師經せんとい問入けるが姫の只右京之進が事計り心よ懸りて細き灯火の影よ越方行末の事ども思つてけはお付ても地藏尊のみと念じ居給ふよいつしう旅の勞れおや眠り給ふ然るよ夜丑満の頃と思しくわいたしく人音して鴈口打ならし南無地藏菩薩姫君の行儀を知しめ給へと高聲お願言さる者あり其聲お驚き姫の夢覚めければ登計らんや寄麗なる草庵と思ひし日金の地藏堂おて灯火の則ち地藏尊の燈明よてぞありける姫のあたりを見廻し給へば桃井右京之進地蔵尊よぬりづき一心に願言して居けるおぞ姫の餘りの嬉しさおやよ右京之進自らの愛よあるぞと宣ふ聲よ右京之進仰天して四邊を見れば浮園姫悠然としておしけるゆゑ躍上りく悦び勇事限りなし某し今朝四人の惡漢を退散し立歸り見るよ姫君のましまさずまの口惜や奪ひとられしと沼津の方へけ行い誰言となく姫君の日金の修行者負参らせて熱海の方へ行しといふと聞て扱へ修行者を頼

みて熱海へ伊越しもやど日金の修行者を道々尋参りしふ
 此所なりと致ゆる人あり立より見れば地藏堂なれば姫君
 日頃念じ給ふ地藏尊の應護をなれて姫君は逢せたび給へ
 ど念じ未だ終らざるお姫君此處お参らする事の有難さよ
 と物語るよ姫も奇異の思ひをなし修行者の我を信じて我草
 庵なりと此所へ伴ひ飢を凌げせんと夕べ三嶋よて地藏尊
 へ備へし如き餅を我も與へ半ば食して其半の爰よりありと
 見せ給ふよ右京之進も心付て能々見ればゆふべ紙を敷て
 備へし餅あり一ツ残りこれ如何よと姫君あたりを見廻
 しけるおつれ来りし修行者の本尊の地獄菩薩お寸分違ひ
 す衣の泥よりたるの最前三上山と田の中よて組合し時
 の泥なれば姫君の隨喜の涙よむせび有難や我危難と地藏
 菩薩の救ひ給ひしならん争で此伊思を敬し奉つるべきと
 泣伏し給へば右京之進も伏拜み世の末世よ及びても日月
 の地よ落給ひす斯る靈驗あらたなる事の有難さよと涙せ
 さあへす程なく夜も明ければ地藏詣での人々来りて姫の

姿を怪みければ右京之進取敢ず是の都方より熱海へ入湯
 の者なり是より道法いり程なるやと問ければ里人答へて
 爰に日金の地藏とやて是を下りたまへば絳巻山熱海へ
 一里よ足らずいと敷けるよ大よ悦び右京之進も昨朝より
 飢たれば此餅をたべけるよ精神強々健康よなりければ偏
 よ地藏尊の伊利生なりと大よ喜び熱海へこそ急ける

○中納言殿親子對面の事

井伊園姫の孝心およりて父の病本復の事

夫より兩人の絳巻山を下り熱海に至り流され人櫻井中納
 言の住給ふ庵の何國ぞと尋るふ里人答へて其中納言殿と
 やらぬ去年より腰たす懸となり給ひいざり歩行人お食
 を求め何國よ住居といふ所もなく此里よ食なき時ハ伊豆
 のお山へ行て食を求めけるゆゑ里人憐み車を拵へ其上お
 家根をよき是を我住家としておのするよしなりと云けれ
 ば姫の聞て有るもあられせやよ右京之進父上の乞食と成
 たまふもあらで二年三年淨々と暮しける事返すも悲

しけれ早く尋て逢せて呉よと宣ふうち里人あれくあの
 車の音こそ中納言殿なれといふより早く姫の轉び行ての
 よ父上伊園こそ参りて侍ると車よ取付泣給へば父の卿も
 涙せきあへず昨日迄も今日迄も都の事のみ懐しく如何成
 しと明暮思ひ暮せしよ恙なく是まで尋來る事返すも
 嬉しけれあれなるの右京之進なるる長の旅路姫の介抱祝
 着せり我去年より痴癪つて終お壁と成此里の人々の恵み
 よて漸く命をつなぐ計我形を見よ鬼界の嶋の俊寛もよも
 是程よのあるまじと涙雨の如く下りければ右京之進恐れ
 入仰の趣き一々某が罪なり去年より姫君一時も早く伊介
 抱よ伊越あり伊旨仰ありしうと心よ任せず漸々娘花の
 井が忠義おより伊供やせしとありし事をも物語れば中納
 言殿彌々涙よ咽び我故よ花の井が身を川竹よ沈めしと
 返すくも不便なれ所詮歸落も叶はず斯る片輪となりぬ
 る某し打捨て都へ歸り寶の詮讀こそ用要なれと宣ふよ右
 京之進承り夫も涙花へ花の井参りなば多くの人の入込



地なれば心を込めて詮議致さんと下郎ながらも源八諸とも
 遣ひたり某し此所へ参る上へ早く伊座所を去つらへん
 と所の庄屋今井何某がとも行黄金を出し一日も早く家
 作を頼み入といふ今井も兼て中納言殿を憐みし事なれ
 ば大に悦び先々拙者方へ家作成就まで伊座留めれど中納
 言殿も衣服を着替させ我庭上の温泉も浴し参らすれは姫
 の甲斐なくしく御を掛父の卿も浴させ参らするも食食同
 様の人なれば終に此温泉も浴し給はず始て姫の手をもて
 痛所を洗ひなごし給へば少し快よしと宣ふを彌々力と
 得て浴させ参らせけるが夫より庄官今井の多くの番匠を
 集め我林の木を伐り夜を日よなして普請成就し如のみな
 らず我庭上の温泉を座敷の中へ取り入るやうよなして中
 納言殿の浴所を營ひければ右京之進大い悦び多くの金
 子を出し普請の料を賄ひはへ移りければ姫の座敷も浴室
 の出来たるを悦び父の卿を浴させ口より地獄の湯名を稱へ
 て洗ひけるよ其靈驗もや一七日よして痛を忘れ給ひ二七

日おしてりくみし腰の延けれは右京之進大に悦び是全く
 日金山の地獄の靈驗ならんと夫より姫の日金へ日参し三
 三度夜三度浴させたまふよ三七日とすよ少しづつ歩行
 し給ふこそ不思議なれ
 一説曰熱海の温泉家毎に座敷の内へ堀を以て堀入る
 事此中納言殿より始りしとや
 ○花の井夕霧と改め伊左衛門の事
 扱も屋敷の亭主の花の井源八を召還我家へ歸り女房も
 引合すお新町廣しといへども花の井は續く器量の者あら
 ざれば悦み事限りなく夫より松山太夫といへるも諸事を
 仕入させけるお手跡つたあうらす歌連歌琴三絃香道まで
 も扱目なれば近々よ突出しの新造よ出ださんと所々へ
 觸るよ諸客の此新造を買へんと其日遅しと待よける却
 説藤屋伊左衛門の不計なくも宿直之助殿癩病を得て諸
 國修行お出給へば今に京都も用事もあらず我内へ立歸り
 しが母番頭も花の井が夕霧と隠しまらす良し居けるゆゑ伊

左衛門の只花の井が事のみ心よ思ひてうつくと若し勞
 孩の如く煩ひければ一人の伊左衛門なれば母番頭大に驚
 きさまよ療治を加ゆれども更に其験なく次第くお瘦
 疲勞ければ如何せんと諸寺諸山へ祈禱を頼ける爰は浪花
 よ隠なき椀屋久兵衛といへる豪家あり藤屋同様の身上な
 れば常よ金銀の取替至て心安ければ母妙閑久兵衛が妹を
 伊左衛門が嫁に貰へんと言入れども久兵衛の合点せず若
 き人の自分の氣に入し婦人ならでの懸縁せざるものなり
 伊左衛門殿得心ならびいつてても進すべしと言てありけ
 るが伊左衛門病氣のよしを聞見舞ふ來り様子を窺ふに全
 く氣の結ばれと見うけたれば久兵衛活氣の男なれば伊左
 衛門を大に恥しめ浪花よ今一二を争ふ身上よて心の儘よ
 ならず病を生ずる事笑ふも絶たり拘ぐとくせし心を打
 捨て青樓へ赴き給へ頃日扇屋より世よ希なる美人新造よ
 出るなり則ち某しが相方松山太夫が妹女郎となし二三日
 よハ必ず突出しよ出すと松山方よりや來りたり斯様の所

へも出給へば心の晴る者なりと勤れ共伊左衛門の花の井
 が事のみ思ひ外に枕の交じと思ひ詰たれば只笑ふのみお
 て答へもせざりけるが母妙閑是を聞て久兵衛様の仰の通
 り終に是まで遊所へも参らず此方西國方の大名方へ出入
 致せば折節新町などの聲應あれども伊左衛門の参る事を
 嫌ひ手代どものみ遣す程なれば自然と體々癩病ひも出
 へば伊左衛門が新町へ伊座同道下さるべしと番頭諸ども
 頼みけるこそおろしけれ伊左衛門の心よいそまねども母
 への孝行と思ひ然らば日限を仰下されなれば伊左衛門と
 云て別れける扱も扇屋方お花の井を夕霧と名を改め松
 山が指南よて八文字揚屋入までを敷へ其日よもなりけれ
 ば椀久方へいひ遣けるよ椀久の伊左衛門誘引して吉田屋
 喜左衛門方へ來りけるお吉田屋夫婦大に悦び椀屋藤屋の
 兩大靈驗伊座臨の定よ夷大黒打揃ふて惠方より來り給ふ
 なりと善盡し美盡し聲應ける椀久の兼て松山と深き中な
 れば新造を伴ひ早く來るべし水上の藤屋伊左衛門と云大

盡あるを急げくど人橋とりけ、るは漸々松山夕霧を伴ひて出来る衣裳風流云へくもあらず夕霧も爰を晴と若飾し心の内より王昭君ヶ胡國へ捕られしおも、ちして今日より何れの人と枕を交す事よやと尋く胸を押静め貞さへも得上松山引添て座を直りけるが椀久の待りね扱々遅滞哉、我同伴の浮客餘り遅き不興して既あ歸らんとし給ふ早々盃を初よと松山盃を取上て椀久よさしけれバ久兵衛其盃を伊左衛門よさして早く夕霧みさし給へといふ然らバ左やう致さんと一ツ引受て香夕霧の君ふつ、う者の盃を浮受あれうしといふ夕霧のいとうるさ事と思ひながら其盃と手よどりて客の貞を能々見れば豈計らんや藤屋伊左衛門なりけれバ仰天して盃を取落しける

○夕霧伊左衛門身の上を語る事

斯て伊左衛門夕霧の互ふ貞を見合せこの如何よと仰天すれバ夕霧の二とせ三年の恨み胸あ通る唯詞のなくわつと

事可笑やそもしなごみ道すべき金やある重ての文通も無用なりとの文牒なれバ仰天して能々見るふ手代清八が手跡なれバ初めて母番頭の所意ならんと悟りけれバや夕霧此返事を見て胸を某しを憎しと思ふらん全く母番頭の言合せての事ならん是の我大和よ在ける留主の中よ源八來りしならん我の大和より京へ出さま、行衛を尋しなりと有し事どもつばらお語りけれバ夕霧少しの疑ひも晴左宣ふも偽りなるまじけれども手跡の君の筆よまがひなしと云けれバ伊左衛門打笑ひて如何よも手跡の能似たれども是の手代清八といふ者の手跡なり我と一結よ入木道よ行我手跡お寸分違はずと評判の男なれバ母番頭是よ書せし疑ひなし去まても憎さの番頭忠左衛門なり疑筆を拵らへ我よ深く隠し僅二百兩計りの事お斯る孝心の者を君傾城お買せし事返そ、母番頭こそ恨しけれ是より我揚詰ふして外の客へ出さすべからず是よて恨を晴し給へといふ夕霧もやうく疑ひ晴けれバ椀久松山其外

計りよ伏沈み絶入計りよ歎けれバ一座興を覺しこの何事と久兵衛驚けバ松山の脊を撫やと夕霧何事とはしたなし心を静よと様々介抱するよ伊左衛門一座を静め各々必ず騒ぎ給ふな此夕霧といふの某し都よて内祝言までせし女なりいり成譯よて斯君傾城との身を沈めしぞ我も此女ゆゑ此程の病氣久兵衛殿お對し恥りしき次第なり如何よ花の井某し大和より都へ出さま、行衛を尋しよ姫諾とも伊豆の國へ下りしと聞て力を落し今の身のいたつととなりたり併し無事の對面の嬉しけれども斯る姿お成たる事いと不審様子を聞きまはしと有けれバ夕霧の彌々恨氣胸よ通り言はんとすれ口へ出さず方なけれバ懐より封せしふを取出し伊左衛門おはたと打付又さめ、と泣沈みけれバ伊左衛門の不審晴す彼多どり上見れば花の井の伊左衛門とあり開き見れば是迄のそもじを懸みしなり椀久兵衛といふ人の妹言等あれバ如何でそもじ如きの公家侍士の娘と女房おすべき殊よ大切の金二百兩無心と

牽頭末社も初めて色を直し扱々不思議の事よて一坐もしめりたり是より目出度改めて浮祝言の盃し給へと皆々淨宜酒開のよ及び各々酔よ乘じ夫より園中よ入て二とせ三とせのうさつらさを物語りけるこそわりなけれ

○源八角力取と成雷電と名乗事

井藤屋伊左衛門居續して放蕩よ成事

却説源八の花の井を扇屋へ渡し八十島吉平方へ來り段々禮謝するよ吉平いへらく足下今よりの主人もなし老母幼き兒を養ふたつさよ困り給ふべし是より角力取よ成給へりし某し如何様よも世話いたさん然る時の年々鎌倉へ通へバ主人中納言殿の安否も常よ問給ひ日非して聞取と成給ふべしある時お大金の給分を取事なればひらみ我詞お隨ひ給へといふ源八も下地好の藝おれバ如何様よも貴公を浮頼みやなりといへバ八十島うち悦び角力年寄を呼び寄て源八を見せ相談の上雷電と名乗を付角力中間へ入けるよ男より能力儘まで強く其上生れ付ての早

業なれば突出しより前頭入雷電源八と呼ぶ最負強き角
 力にて此度の勦進角力ハ雷電一人なりと浪花中の評判お
 て流行けるが今度の大關ハ丸山三上山關脇ハ八十島源氏
 山よぞありける然るハ九州の桶岩とて六尺有餘の男五日
 の間土一付六日目は桶岩雷電との取組成しケ物の見事
 ハ雷電桶岩を投げれば見物大ハ膽を潰し扱々雷電ハ手取
 り哉と彌々大入よぞ成けるお急よ七日目ハ三上山百々
 右衛門八十島吉平との取組成しケ其日ハ八十島少し怪我
 ありければ此角力明日へ延しんこんと行司斷はりけれハ
 見物一同ハ雷電を出せと聲々呼ひるよぞ年寄も、今
 年初めての雷電數年取の三上山ハ合せじといふハ雷
 電是を聞て私しやう、當年初出の角力取三上山關取
 負ハ知れし事なれば恥ども存せず一番取て見度よし願
 ひけれハ八十島も大ハ悦び其方其心ならハ負ても恥みな
 らを勝てハ手柄なり併し我きてと容易ハ三上山ハ勝ハ
 しども思ハねハ心を込て取ハしと云ひけれハ行司罷り出

て見物好お寄て三上山雷電と取らせ見入ハと斷
 り言ハ諸見物一同ハ雷電早く出よといよめさける三上
 山百々右衛門ハ雷電を小兒の如く思ひけれハ己今年初
 て土俵へ出某し杯ハ取組んどのハふと野郎哉骨を打折
 重て土俵へ上られぬ様よして呉んと嘲笑つて土俵へ上り
 ける雷電ハ心を静め透をねらつて居る所を三上山狼の
 吼るか如き聲を出しぬといふて人碌よせんと刎掛るを
 雷電ハ右ハはづし左へりハし飛鳥の如く飛廻り容易ハ取
 付せねハ三上山大ハ怒り無二無三ハ組付所を腕を取て土
 俵の真中へ苦もなく打付けるハ目覺しりける次第なり
 見物ハ山も崩る、如く喝聲投たり雷電勝たり雷電と多
 くの纏頭を賣ひ勇み進んで入よける三上山ハ何程の事有
 んど侮りしハ土俵の真中へ打付られ面目を失ひ是より電
 電を憎む端とぞ成あける夫より雷電ハ評判喝聲ハ關取並
 の給金ハ成けれハ母も悦ハせ此度鎌倉へ赴かなハ中納
 言殿主人右京之進殿も目目ハ掛り大坂の始末をも物

りせんと鎌倉の角力待よける斯て藤屋伊左衛門ハ計ら
 ず花の井面會して其日より宿へハ歸らせ居續おなしけ
 れハ母番頭大ハ驚かさまハ迎の人を遣しけれども似々
 の意恨あれハ馬耳風の如く更ハ聞入されハ母ハ櫛屋久兵
 衛を深く恨み篤實の伊左衛門を斯様の傾城買よなしたる
 も皆久兵衛の業なりと始め頼みし事ハ打忘れさまハ惡
 様よいふハ皆是世上の習ひなり

○鷲塚荒五郎夕霧ハ懸想する事

井伊左衛門勘當を受ける事

爰ハ鷲塚荒五郎ハ在京の内さまハの悪行をなし宿直之
 助を癩疾となし歌仙の色紙を盗ませなと其積悪ハ將軍
 も行跡の宜しうらざるを憎み給ひ終ハ國へ歸し給ふ夫よ
 りハ國住居なしけるが病氣と云立浪花津へ出發生として
 逗留し抱への角力取三上山百々右衛門を召呼己ケ酒の相
 手となしつし新町へ來り阿波大龜と名乗屋屋の夕霧
 ハ見初吉田屋喜左衛門より度々呼出すといハ夕霧ハ

伊左衛門ハ揚詰なれば外の客へハ出さるよし大お是を憤
 はると雖も彼ハ浪花一二の家家なれば大名の手も及ハ
 ざるハ金銀よて獨り心を痛居けるハ伊左衛門ハ此阿波大
 龜と張合金銀を惜まず遣ひけるゆゑ二年餘りハ二万兩計
 りも遣ひ込けれハ母番頭大ハ驚き斯て置なハ藤屋の身上
 殘らず傾城に打込ハ家ハハ替難しと親類打寄伊左衛門
 を呼付段々云聞せけれども聞入されハ詮方かく紙子一衣
 を與ハ勘當をどしたりける然ハ伊左衛門も初めて夢の覺
 たる心なれども夕霧を花の井といふ事を云す斯る身持ハ
 成たるも全く母番頭の心よりと却て兩人を恨み物をもい
 ハで出行けるハ夫より何國を當といふ處もなく扇屋へ來
 るよも紙子の身の上ハ成たれば面取りしく漸々よして夕
 霧ハ出會云々の事を物語れハ夕霧ハあるよもあられ是
 皆わらハ罪なり如何せんと思案せしが斯る身身ふなり
 給ひてハ勿々曲輪よても寄付ハまじ一先京都の源八ハ老
 母の方へ行て愛を凌ぎ給ハ我子伊太郎も最早四ツよなり

ぬれば是を心の樂しみと暫く難儀となし給へ、又能思案
 もあるべしといふ、伊左衛門涙を流し某し、そのなれの心
 を嬉しく思ひ浮々と月日を送り終、京都の姥が方へ音信
 さへせず、今更斯る身も成て争で世話も成べきと勿々受引
 ね、夕霧さま、諫れども假令飢死ればとて姥が世話よ
 りならずと言切けれ、夕霧又思案して京都よ、わいさ、折
 ふし、のほろを見んと思ひて斯うせしが、まうら、伊豆の國
 熱海に、中納言殿姫君我父右京之進殿今、勿々配所の如
 く、ひなく、緩り、暮し給ふと聞ぬれば、暫く是へ行給ひて、伊
 左衛門のゆるるを待給へ、伊一人子の事なれば、伊袋様争で長
 く、勘當なし置給ふべきといふ、伊左衛門も得心して、右京
 の進殿も、僅二百兩許りの事、て似狀と、言なぐら、いな
 み、遣し、夫ゆる、斯傾城、あなり下りたるも、皆我谷なれば、是と
 ても、面、會、され、ね、せ、も、母、番、頭、の、所、意、よ、て、斯、る、事、に、成、た、る
 と、言、聞、な、ぐ、ら、伊、豆、へ、下、ら、ん、斯、る、姿、よ、て、浪、花、よ、鳥、鷲、つ、き、藤、
 屋、伊、左、衛、門、の、形、を、見、よ、と、後、指、さ、し、れ、ん、も、い、と、口、惜、其、内、の、

の、腕、久、を、頼、み、勘、當、の、詫、を、せ、ん、と、松、山、よ、逢、て、勘、當、の、詫、の
 事、を、久、兵、衛、殿、よ、偏、み、頼、み、參、ら、せ、よ、と、吳、々、頼、け、れ、ば、松、山、の
 涙、よ、む、せ、び、昨、日、お、替、る、伊、有、様、嘸、々、口、惜、く、も、悲、し、く、も、思、え
 ら、ん、伊、し、夕、霧、の、事、の、我、付、添、居、る、上、の、伊、心、易、う、れ、伊、勘、當、免
 る、ま、で、の、此、姉、の、外、の、枕、の、交、さ、せ、ま、じ、伊、勘、當、の、事、の、久、兵
 衛、様、能、し、計、ら、ひ、給、ふ、ら、ん、是、計、け、君、へ、の、伊、饑、別、なり、とい、ふ
 よ、夕、霧、も、伏、拜、み、妾、伊、左、衛、門、様、よ、離、れ、な、ら、い、り、なる、人、よ、も
 肌、と、觸、れ、う、と、是、の、み、心、苦、し、く、思、ひ、し、み、姉、様、の、伊、詞、よ、力、を
 得、い、と、悦、入、事、限、な、し、斯、て、あ、る、べ、き、事、な、ら、ね、ば、泣、々、伊、左、衛
 門、の、出、行、け、る、よ、と、夕、霧、の、身、も、浮、計、よ、泣、悲、み、松、山、も、と、も、よ
 涙、お、む、せ、び、ける、夫、より、伊、左、衛、門、の、伊、豆、の、國、を、必、さ、し、て、行
 ん、と、編、笠、打、冠、り、日、頃、覺、え、し、謠、を、門、々、あ、立、て、一、錢、を、貰、ひ、露
 の、命、を、つ、な、ぎ、鳥、が、鳴、吾、妻、へ、赴、く、こ、そ、淵、淵、と、變、る、世、の、中、と
 墓、な、り、り、ける、次、第、な、り、松、山、の、扇、屋、の、亭、主、よ、向、ひ、て、且、那、お
 も、伊、存、の、夕、霧、の、身、の、上、伊、左、衛、門、様、今、伊、勘、當、の、身、と、成、し、り
 也、も、程、無、伊、勘、當、も、ゆ、り、侍、ら、ん、夫、迄、夕、霧、の、外、の、人、よ、枕、を、交

せて、の、姉、女、郎、の、松、山、伊、左、衛、門、様、へ、立、ち、さ、ず、何、と、ぞ、夫、主、で
 座、敷、計、り、勤、め、る、や、う、な、し、下、さ、れ、よ、と、頼、み、け、れ、ば、扇、屋、の
 亭、主、も、打、點、き、如、何、よ、も、是、ま、で、伊、左、衛、門、殿、二、万、兩、計、り、遣、ふ
 程、の、大、盡、な、れ、ば、今、の、勘、當、の、身、と、な、る、と、も、程、な、く、勘、當、も、ゆ
 り、な、ん、是、と、も、夕、霧、の、働、き、置、た、る、事、な、れ、ば、外、の、奉、公、人、と
 の、違、ふ、べ、し、氣、儘、お、勤、め、よ、と、扇、屋、へ、夕、霧、の、座、敷、計、と、觸
 け、れ、ば、各、々、不、審、し、て、傾、城、の、座、敷、計、り、と、仕、組、の、富、札、の、取、と
 い、ふ、事、の、あ、し、と、笑、ひ、ける、男、自、漫、の、客、の、己、座、敷、計、とい、ふ、と
 も、度、を、重、ね、て、呼、な、ば、阿、の、方、よ、り、帶、を、解、せ、て、見、せ、ん、と、却、て
 夕、霧、へ、ど、り、な、た、こ、な、た、よ、り、い、ひ、て、流、行、け、る
 ○源、八、の、母、娘、難、小、兒、を、運、て、浪、花、へ、到、る、事
 斯、て、千、本、通、り、の、老、母、の、花、の、井、よ、り、預、り、し、小、兒、を、大、切、よ、育
 て、付、れ、ば、折、ふ、し、夕、霧、よ、り、金、子、を、登、せ、不、自、由、な、く、暮、せ、し、よ
 伊、左、衛、門、勘、當、よ、り、我、身、さ、へ、儘、な、ら、ぬ、身、の、上、争、で、老、婆、の、方
 まで、心、を、付、る、事、の、な、る、べ、き、次、第、へ、音、信、さ、へ、せ、ず、源、八
 も、此、程、長、崎、へ、角、力、お、行、け、れ、ば、い、つ、と、な、く、家、衰、へ、其、上、去、年

より、眼、病、を、頼、み、終、に、兩、眼、を、い、け、れ、ば、漸、々、五、ツ、お、なる、伊、太
 郎、を、枝、柱、と、頼、み、暮、せ、し、よ、伊、太、郎、頼、り、よ、父、母、を、慕、ひ、浪、花、へ
 行、た、し、と、歎、け、れ、ば、今、の、京、都、お、在、て、も、一、飯、を、助、く、る、人、も、な
 け、れ、ば、僅、の、家、を、賣、代、な、し、少、し、の、銀、子、と、懐、中、よ、し、て、伊、太、郎
 お、手、を、引、れ、浪、花、津、指、て、歩、行、け、る、夕、霧、を、尋、ん、り、全、盛、の、太
 夫、職、に、乞、食、の、姥、を、尋、ね、行、て、の、勤、の、取、な、ら、ん、と、是、へ、の、尋、ず
 藤、屋、の、松、子、を、聞、け、る、よ、伊、左、衛、門、の、勘、當、受、行、衛、左、れ、す、と、の
 事、な、れ、ば、力、を、落、し、せ、ん、方、な、け、れ、ば、長、岡、邊、の、乞、食、宿、あり
 て、日、々、住、吉、天、王、寺、邊、の、人、立、多、き、所、へ、出、前、お、主、を、養、育、よ、し
 の、書、付、を、出、し、伊、太、郎、の、且、那、様、一、錢、下、さ、れ、よ、と、付、歩、行、一、錢
 二、錢、を、貰、ひ、其、日、を、送、り、け、る、こ、そ、不、便、な、れ、却、説、阿、波、大、盡、荒
 五、郎、の、伊、左、衛、門、お、傾、城、を、買、支、け、口、惜、く、思、ひ、し、よ、伊、左、衛、門
 勘、當、受、て、行、衛、左、れ、す、と、聞、て、大、に、悦、び、夕、霧、を、手、よ、入、る、時、節
 到、來、と、其、日、よ、り、揚、詰、に、な、し、け、れ、ば、夕、霧、の、座、敷、計、あ、て、一
 度、も、床、へ、の、入、さ、れ、ば、阿、波、大、盡、心、お、怒、る、と、雖、も、此、道、計、の、金
 銀、權、威、よ、て、も、往、ね、ば、さ、ま、詞、を、も、て、言、寄、れ、ば、夕、霧、の

返答をもせず只うつくと伊左衛門の事のみ思ひ暮しける三上山百々右衛門も日々率頭なり新町み来りけるが扱々太夫様の物思ひしき貞付いつても酒の興も覺果るなり明日の天王寺より生玉へ遊覧あり君の心を慰め給ひ然るべうらんどいふ籠の鳥同前の夕霧野邊へ出なば少しの愛を忘る、事もありなんと天王寺参詣の事を阿波大盡お願しりバ大お悦び是の一與ならん天王寺より浮瀬の遊び百々右衛門宜しく計らふべしと各々悦び勇み行厨提重を持せ引船禿も天王寺へこそ詣でける

○夕霧伊太郎の資金を興ふる事

井三上山老姥を殺す事

斯て夕霧の阿波大盡お誘ひれ率頭ふり三上山百々右衛門毛氈を打つたげあたりを拂へバ夕霧が艶色三上山の大男も物見武市中群集をなして附歩行ける合那が辻より天王寺へ詣で夫より清水浮瀬より幾代君がための大盃よて呑りけ浮瀬に至て阿波大盡三上山諸とも大お酌して

打倒けれバ夕霧の引船禿を打建裏の小門より勝安坂の方を静し見廻る前より付付を置て賤らぬ老婆の盲人六ツ計の子を傍お置き往還の人々一錢を乞ふさま夕霧のあはれと思ひ引船は鳥目を遣はせよと云て能く見れば源八が母なりこの加何ゆと側なる書付を見るよ主人幼少を養ふたつとあり切の二歳の時別れし伊太郎にやと見れば見る程伊左衛門生寫しなれば悲さやる方なく如何して盲人となり何故斯まバ落れしと問んとするよ引船禿よ取らぬあらぬと聞れず聲を曲てお姥のいつより盲人となり其子のろなたの孫みやと忘れぬふりよ尋れバ盲婆會釋してきた様りの存せねとやさしくも尋下さる、事りな長々しき物語りなれども尋聞くたされ姥が主人の娘は此子を妾よ預け身を賣主君へ忠義を立たまふ其後折節の心附をなし給はりしや去年より音信もなし一人の悴も有は是も長崎へ参り便もなし其内は盛々の眼を煩ひ底眺といふものよて終る盲人となり却て此子の介抱よ

預り最早諸道具衣類まで賣代なし烟の足しとせしよ此子か頼み浪花へ行たしと泣けるゆゑ此子の兩親の當地よあればたづね逢事もあらんと爰元へ下り父を餘所ながら尋れハ掛當受て行衛まれずとの事夫ゆゑ力を落し世渡るたつとも盲人なればせんまへなく斯る街へ出て人々の浮情を受待ると明より夕霧のどろく胸を押静め猶も腹を幽め父をこそ行衛まれずとも當所よ母ありと知ばなき尋給はぬぞと云れて老婆の涙の咽ひ夫の此子も明暮戀慕ひ給へども此後袋様の今浪花は隠なき太夫職なり給へバ乞食婆々々尋察らバ浮身の恥と心も心を取直し斯やうの姿よ成ても今迄の尋やさすと言度毎夕霧の身も世もあられ平胸を磐石ふて打る、心地して人目あらずバ我子を抱き上て名乗んものと涙を呑込苦さの焰を呑も増りける伊太郎の夕霧をつくくを見て此叔母様の何ぞして泣給ふ泣せども一鏡下されよと袖すりければ心なき引船禿も、哀を催し婆々殿の咄しよて最前の酒も覺果た

り太夫様いざ浮瀬よて呑なはしやさん浮出なされと引立れば夕霧のあはれあられず如何せんぞ千々よ心を碎きしが漸々よ氣を静め懐中より小粒十四五取出し服箱お包み是れ幼き人今婆殿の咄を聞供よ涙を催したりそなたお是を進する間是よて美しき衣裳も替へて替へ賃給へと差出せば伊太郎押殿の開き見て此黄色なる少さる物の何りならん只鏡を下されよといふふ老婆探り寄小粒を手よ取大よ驚き斯る大金を下さる、いひ成り成り方ぞや漢問しや金といふもの老らぬ子なれば是よりの鏡をたべとの能々乞食よなり下り給ふりやと消然と泣けれバ夕霧の堪兼思はずわつと泣出しけるよと老婆心付此方如何さま仔細のる浮方ならん名を名乗下されよと探り寄をきたなの婆々やと情なくもやり手の押こりしあゝ浮瀬へ浮越へへと無理よ引立行けるや阿波大盡の夕霧が見えざる故方々を尋しむ乞食婆々を物語るを仔細あらんと立忍ぶよ三上山も同じく来りて互お叫び合伺ひ居けるッ泣入さま小

粒をやりしをも篤と見置て三上山に呼さけるの兼て夕霧
 伊左衛門を種をせしと聞し最前よりの跡全く乞食
 の悴こそ伊左衛門の種の小悴お相違あるまじ汝此小兒を
 奪ひ取て来るべしこやつ責さいなみて我心お随ふやと
 いふなら假令鬼の如き女なりとも子の愛引れていな
 む事なるまじ屈竟の人質なれば必ず仕損せる事なりれど
 云合め其身の何喰ぬ貞めて浮瀬に歸り又々酒をぞ初めけ
 る三上山百々右衛門の立腹の様子を見るよ老婆小兒に向
 ひけふの思ひなる結掃なる金を貰ひたれば翌日呉服屋
 へ行て美しき小袖を調へ坊々若せやべし悦び給へ最早通
 りもなければ歸らんと産を巻て打りたけ合邦ヶ辻の方へ
 伊太郎の手を引れとばくと歩行ゆくの思ひかけなき後
 より老婆を打倒し伊太郎を小脇よりい返りけ出をを老婆
 の盲づりみよ三上山が足取付何者なれば此狼藉たどへ
 此身の寸断くも成とて其子の渡せまじとむまやふり
 付を面倒なる者めと片足搦て脾腹を丁と蹴るお大力の男

よまた、蹴られし事なればやと計し血を吐て即座お
 息の絶えけり然バ伊太郎のやれ婆よあせせるを半拭おて
 猿轡どなし小言をはさく事なりれと傍を見廻す一人一人
 もあられれば天の興へと長町の方へ駈行ける老婆の船の
 中へ倒れ死けれども乞食婆をなれば非人ども打寄引りた
 げ後島へ打捨けるこそ無惨なれ
 ○阿波大盡伊太郎を賣て夕霧を口説事
 斯どもちらす夕霧の阿波大盡諸ども駕打乗て新町へ歸
 りけるり老婆が云ひし事久々よて伊太郎が良を見て彌々
 伊左衛門が身の上を案じ心地悪しけれ直し扇屋へ歸か
 ける翌日の早朝より吉田屋の迎來り無理に夕霧を連行阿
 波大盡さま口説といへども心地悪し逆物さまへ云ね
 ば大盡大に怒り傾城の賣物めて多くの金銀を出し揚詰よ
 ますの汝も枕を交さん為ならせや勿論座し計といふ女
 郎の古來より其例を聞す今日某しも心を極たり彌々枕
 をうのすまじきや其方も心を定めて返答せよと日頃よ變



り氣色を變て云けれバ夕霧の打笑ひ座敷計を勤る夕霧と
 存存の上呼び給ふ枕をうはさぬとて怒り給ふの君の
 無理ならずや外の人お枕を交し君計よつらくあたたらバ
 怒も道理ながら如何様の彦方よも一度の枕を交したる事
 なき夕霧あたら口風引くせ給ふなど煙草輪お吹き取あ
 へね阿波大盡彌々怒り汝左程難面心ならバ此方よも
 計らふ旨あり夫々三上山云付置し通りよ引出せといふよ
 り早く中庭へ伊太郎を高手小手お縛め百々右衛門跡よ引

添立出れば大鍋は油と入其下は炭火を焔々を起し持出る
 を夕霧一目見るお伊太郎なれば仰天それども愛ぞ大事と
 見向もやらすありける伊太郎の夕霧を見て昨日の金を
 下されし叔母様其旦那様と詫言してとやう愛を解て貸ふ
 て下され手々々痛いと悲しめ阿波大盡はくくと手點
 き無手も痛むべし夕霧此小悴覺えありやと尋るよ心を定
 めて成程さのふ勝曼坂ありし乞食の子よ侍らすや如何
 なる其悴なり其方何の由縁ありて多くの金を遣へせし

やと問ければ夕霧打笑ひ阿波大盡様ともいはれ給ふ伊方の多くの金をやりしと聞きし仰事哉賤き勤の致せども乞見よくれる金いつよてもあれ程位の内遣しと云けるよど阿波大盡打點成程全盛の太夫職なれば然も言へし然らば其俸いりやう責さいなみても不便と思ひすやと問掛れば夕霧早くも是を悟り假令伊太郎責殺さるゝとも探の背くまじと心を定め是のをしし仰事りな乞見の子を責たまふを妾何のためよ不便存じしへんと云ひければ阿波大盡大に怒り鍋なる油を柄杓受庭あゝる伊太郎が天窓より流し掛しおあついとひて泣叫べば霧探夕霧が方をまろりと見やり此油次第熱湯の如く成どきの命のあるまじ早く心を定めて某しは随ひ此俸が命を助る心のなきやと云ひければ夕霧打笑ひ乞見の子の責殺さるゝが不便などてそもじ泡あ随はんや可笑しき事を宣ふぞと酒を呑みてありけるが心の内不便可愛さ千萬無量の悲しみを酒よまさらしありければ阿波大盡油の

熱立を見て今是を掛れば小俵が命のあるまじ不便の事と云ながら一柄抄さんぶと掛れば向うの以て堪へる伊太郎の七轉八倒して苦しむまじ三上山も繩を取ながら今一柄抄掛なれば誠命のあるまじ早々返事を仕給へと見上るふ夕霧の我身熱湯浴る心地して心よ思ふ幼少時より姫君と地獄尊を信じ一日も懈怠なく地獄尊を誦誦し信々片時も忘るゝ事なきよ斯る災難を余所よ見給ふ伊佛こそ恨めしけれ誠佛の誓ひ偽りなりと地獄菩薩を恨み猶も心の内にて伊太郎早く死で母が苦痛を休めよと千々の心を取直し見向もやらず居けるゆゑ阿波大盡も三上山も大よ不興し又一柄抄りければ骸の朱の如くなり虚空を掴み終よ墓なく成よけるされども夕霧の見向もせされば今ハ陰方なく死骸を打捨いさや大座敷にて一盃呑直さん百々右衛門來れど打連たち奥深くこころ入ふける跡を見やり夕霧のとしや遅しと庭へ歸ひかり盛し伊太郎が死骸よどり付扱も情なや生れ落るより苦勞のみをして乞

食よまで成下り今又母が爲よ未だ見も聞もせぬ奇き責苦に逢て死したる我子の廿四孝おも増りし孝子をや心を鬼よなしたる母を不便と思ひて少しの恨を晴してくれよと前後不覺に歎き悲しみける斯る所へ禿也も追々よりけ來り伊客様待りねなれば早く伊越おれと無理お手を引奥座敷へこそ連行ける

○油りけ地蔵の由來

或昔ふ日婦人室に在るとき父を天とし出ての夫を天とすど實は花の井の能是を守り傾城と成ても其真探を變せず我子を殺して操を正しらす是天下の烈婦といふべし却て説夕霧の座敷の隙を窺ひ今一目伊太郎が死良を見んと抜出て中庭よ來りのよ可愛のもの、有さまや嘸や若しく有つらん焼のいりよ成つるぞと問たさの山々ながら人目の關も隔られ詞をさへりけざるを母と去りなれば恨みんにえらでも若や助るうと我方詠めし可憐や不便やと人目あらねば聲をあげ泣沈み絶え入りよ見えけるが漸

々よ心を沈め切て死骸と納んと抱上んとするよ女力よ中々地も離れさればこれ不思議と能を見れば我子よのあらで辻の石地蔵を高手小手よ縛しめ油を注りけしにてありければ夕霧の仰天し扱ひ日頃念じ奉つりし地獄尊の利生よて我子の身代り成給ひし勿躰なくも最前ハ心の内よて地獄尊を恨み參らせし事の恐しや免させ給へと禮拜し然も我子の何國へ送けんどあたりを見廻せば叔母様坊の愛よ隠て居ると様の下より道出ければ二度驚きあの恐しき者ども何としてそなたを縛めず此石地蔵を縛めしよやと無端嬉しく尋れば伊太郎も不審晴す夕霧の大さ成男様を蹴殺し坊を奪ひ愛へく、りて來りしがいつの間よやら繩の解けたればそつと様の下へ這入しがゆふべうら寝ぬゆるよ様の下で寝入し叔母様の泣聲に目々見しと聞度毎地獄尊の利生を奪み然も老坂の三上山み殺されしとや扱も情なや昨日逢し時我ども知ぬ盲人の身の上を悟りし時の悲しさつらさ身を切やうよ思

ひしお喉や此子を奪ひ取れしと口惜くありしならん
 いとおしやと伊太郎を抱しめ泣居たりしが太夫様とく
 呼立る聲お聞きそなたを又患者とも見付なば今度はい
 り成目よやあへん先此小袖櫃隠れて音せぬやうにして
 居やと伊太郎を押入蓋引しめ石地蔵を力まじりせて漸々
 椽の下へ隠し左あらぬ跡よて奥座敷へこそ到りける阿波
 大靈三上山諸とも立出ひそく聲よていりお三上山我此
 程の揚代催促するゆゑ留守居ともへ首付しよ浮國元より
 若殿の浮用よて一錢も差出す事なうれと仰られしゆゑ
 罷成さるよし最早此後ハ金銀自由ハ成まじ先年盜ませ
 置し公任の色紙我是迄ハ肌身を離さず持たるは是を出
 入の町人椽屋久兵衛方へ持行我家代々の重寶なれと急
 金子入用ゆる據ころなく質物入るといふて金子五百兩
 借受来るべし必ず悟られなど呟いて色紙を渡せば委
 細吞込出行ける暫くありて金五百兩と質札とを持來り荒
 五郎を呼出し金質札を渡し椽屋方よても多大切の寶長く

の預りやまじけれとも急浮用よいへ金子差上り問必
 ずく急よ金子返濟下さるべしと呉々もやされいとい
 ふふ夫ハ心得たり此質札我手ありてハ詮議の手懸おも
 成べし其方預り置べしと呟き合骨折代なりと三上山二
 十兩を與へ夫より吉田屋の亭主に揚代其外を拂ひ又々大
 騒ぎをぞなしよける
 程經て吉田屋左衛門椽の下より石地蔵と見出し大
 驚是いまさしく天王寺道分の地蔵なり如何して此
 所へ來りしぞ勿跡なしと男ども云付元の所へやらん
 とさし荷て來りし船場邊りよて俄此地蔵鑿石の
 如く重くなりて一足も歩行れね此所よ捨置歸りける
 となり夫より此地蔵尊願を懸るよ繩とめておどり油を
 ろくるよ懸懸著るく日々繁昌し今よ其所ありて油り
 け地蔵尊と唱へ諸人を救ひ給ふぞありがたき
 ○懸塚荒五郎勘當を受角力取と成事
 斯て夕霧ハ伊太郎を小袖櫃隠し扇屋へ歸りけるが勤の

身なれば詮方なく八十島吉平を密よ招き何卒源八長崎よ
 り歸る迄預りくれよと頼しうバ八十島二首とも言ハす心
 能受引伊太郎を抱き我家へ歸り質の子の如くいつくしみ
 育ける扱も椽屋久兵衛ハ公任卿の色紙を質お取けるが番
 頭言やう此歌仙とハ天下よ只三十六枚ならでハなき寶
 と承まハりやハ阿波の大守所持と中事も是中承まハ
 りやさず偽物よてもやハハんえりし阿波へ聞合せお遣
 され彌々浮資よ相違なくバ預りなされ偽物ならハ早々
 浮返しなされいへど皆々口を揃ていふよ久兵衛も尤よ
 思ひ阿波へ手代を遣し若殿様急よ金子浮入用なり迎浮家
 の重寶公任卿の歌仙を浮遣しなされいよ付金子五百兩
 差上右の寶預りや置い何卒早く浮受戻し下されい様お
 どや遣しけれバ家老用人眉をひそめ其歌仙の色紙とハハ
 天下よ只一物おして代々櫻井中納言殿預りなりし先年
 紛失して中納言殿其罪よよりて伊豆國へ遠流ありしと聞
 傳へたり若殿如何して浮手よありや甚だ不審なりと大殿

大膳殿よ斯と告けれバ大お驚き其歌仙此方よ有と禁庭へ
 聞えなバ一大事なり荒五郎如何して手よ入しりハえらね
 ども近年身持放蕩よなり將軍よも浮目よあづり歸國を
 仰付られしよ又々浪花おて夥多しく金銀を遣ひ果したる
 よし留守居共より度々や來りしお又々椽屋より歌仙の事
 中來る事一大事なり一日も早く勘當し將軍家へ訴へ置な
 ば後日の難儀ハ懸るまじと家老笹山源治兵衛と浪花へ差
 遣し荒五郎を勘當し直お將軍家へ浮届やべしと云渡しけ
 れバ源治兵衛早速支度して難波津へ來り荒五郎よ面會し
 大殿より勘當の旨よ言渡しけれバ荒五郎大お驚き口を開
 んどする所を有無を云さず足輕中間よ引立させしよ荒五
 郎ハ夢の覺たる心地して寄べなき身よ成けれバ三上山百
 々右衛門方へ行て勘當受し趣きを述何分頼よし云けれバ
 百々右衛門も迷惑なから是迄思ふなりし荒五郎なれば否
 とも云れず差置けるが笹山源治兵衛ハ夫より京都よ登り
 將軍家へ懸塚大膳の一人荒五郎儀行跡宜うらさるよ付勘

當仕り以旨相届け國元へ歸りければ荒五郎の阿波大盡と
名を取飛鳥も落る勢ひなりしが昨日お替る世の中今の三
上山の禪持となりし少し力量もあれバ角力取と成り
鳴戸岩と名乗を付けるが流石大惡無道の荒五郎なれども
我身を取て新町へさへ行事ならねバ夕露の此事を聞始め
て安き心よぞなりおける

○筒井宿直之助伊左衛門お出會事

爰お筒井宿直之助の近習正木主膳甲斐しく伊供し西
國四國の靈佛靈社を巡拜し紫の果迄も見廻り惡疾を平
癒なさしめ給へど一心願給ひし故や膿汁の出る事ハ
止るといへども面貌の昔しよも似ず淺間しと貞形となり
給ふぞいたのしき扱西國を巡廻し終りければ東國を心
し美濃の谷汲より信濃の善光寺へ參詣せんと笠打傾け主
膳諸ども歩行ければ向ふより破れ編笠お紙子を着し諸を
諷ふて來る者あり宿直之助殿も常に諸を好み伊左衛門
テワキおて諷し其音聲藤屋の伊左衛門よさも似たれば

て只今の中納言殿諸共ゆるやうお暮し趣きを承はり一
先是へ行て勘當の詫を待へしと勤めゆゑ是へ下らんと
道々乞食して罷り通るお盡ぬゆ縁とて不圖此處おて伊目
お掛りし事の嬉しさ熱海より不思議の温泉ありて諸病
平癒するとの事なれば是より直熱海へ越遊べされ温
泉お浴し給ひなば病氣平癒疑ひあるべうらすと勤め參
らそれバ宿直之助殿頭をより假令此病氣平癒する温泉お
りとも此貞をもて争ひ圖姫よまみえんと受引給へねバ主
膳詞をうへし結納こそ遣はされずとも一旦ゆ縁を粗れし
姫君なれば伊姿の替りゆゑも争ひなみやへし夫を嫌ふ
伊心ならバ窺たる伊姿よても心ハ鄙俗よとされり然バ
姫の心よためし操を窺ひ給へど伊左衛門諸ども勤れバ宿
直之助殿も其温泉よて元の姿よなるならバ取べきも有
ずと漸々得心して夫より三人打連熱海へこそへ赴きける

○伊圖姫操を立る事

并直宿之助癩疾平癒の事

イみ見けるお形格好も伊左衛門お違ひなければ主膳も不
審し藤屋伊左衛門よ是程まで似るものよやされど大坂一
二を争ふ豪家の争で乞食おなるべきと目を定めて是を見
るお伊左衛門よまがひなけれバ大いお驚きいりよ伊身ハ
藤屋伊左衛門よあらすやと聲をうくれバ伊左衛門仰天
してこの主膳殿よておひするや若殿よてまします伊安
胎の跡恐悦至極しかし我身のなれの果を伊賢下されよと
さめくと泣けれバ宿直之助殿も哀を催し俱よ涙よ與
給ひしが去よても汝いり成事よて斯ハ落れしぞ不審し
と等けれバ伊左衛門涙を押へ花の井よ廻り逢しより似
せ文の意氣路おて二万兩餘りの金を遣ひ捨し始末まで落
もなく語り君ハ長々西國巡禮より四國迄巡り今又何國
へ行給ふ伊心おやと問けれバ宿直之助殿されバ是より信
濃の善光寺へ詣んと思ふなり今一度元の宿直之助よなり
度より外お望みハなく明暮佛神を祈るといひけれバ伊左
衛門沈吟してありけるが某し事も花の井お父伊豆の國お

櫻井中納言殿ハ右京之進お忠節よて多の金を持來り家
をまつらぬ座敷に温泉をたくはへ是よ浴しけるふより病
氣本復なしたれば夫よりハ手跡の指南又歌の事を教給ふ
よ今ハ鄙よも心至りて和歌を好む者多くありかく遠流し
給へバこそ和歌の門人となり直熱海を教示を受る事の有がた
さよと多門人出來て月並の歌合せ或ハハ褒貶の歌の會
なを問なくわれバ今ハ中々有福お暮しけるが伊圖姫も殿
の手業を習ひ糸をとり機を織習ひ給へバ右京之進ハ若者
共よ御術柔術を教へ次第くお門人も多く今ハ都よ在ん
よりハましならんと思ひ暮し給ひける扱も筒井宿直之助
主膳藤屋伊左衛門ハ漸々熱海へ尋行中納言殿の家居を見
るよ中々配所の住居と見えず家居つゞくしく幾問も
有ていと賑々敷暮しなれば伊左衛門大よ安堵し先一人入
て伊左衛門こそ参りていといふよ右京之進立出是を見て
大お驚きさてく斯變り果たる姿よ成たるハいり成事ぞ
と尋るよありし事をも語り途中おて宿直之助殿は廻り

合伊俱中て来りたりといふ姫君さるび出夫の嬉しや何
 國よましませを早々逢参らせたと表へ出れば知らぬ男
 二人のみ居ける故伊左衛門宿直の助の何國みかひもど
 早く伊俱してよとあるは宿直の助の何國みかひもど
 とし給ふを主膳引とめ無理の内へ伴ひ参らせ某し先年
 伊左衛門が結納を持参せし正本主膳よては主人宿直之助
 病氣平愈まで筒井家を退けられ夫より諸國の神社佛閣を
 巡拜し不計なく伊左衛門に出會若殿を温泉浴し病氣
 平愈なされ再び筒井の家名相續あり度願よて是まで伊
 俱中せしと荒増し語りければ中納言殿も奥より立出給ひ
 宿直之助を見てあないたのしや都廣しといへども並なき
 美男と聞し其面影のいりなる過去の因果もや心置なく
 此方よ逗留して温泉浴し給へ人の斯る路目こそ大事な
 れ姫も此人を大事よせよと宣へば伊國姫の猶更争で自鹿
 略も致し侍らぬ日頃念と奉つる地蔵尊の利益ふて日あら
 すして本復し給へんといふ心能宣へば宿直之助の猶更

取しく貞さへ上給へず某し斯る悪疾を受るも前世の惡業
 と思ひ斷念て姫を出會事を取何國へも行んとせし主膳
 よ引とめられて面目もなき對面と涙もむせびければ姫の
 いやく涙ふくれ必ずく心苦しく思し召事なれ運付
 本復なされしめんと夫より問なく座敷の温泉浴し姫の甲
 斐しく地蔵の浮名を稱へ洗ひつゝ介抱したまふもど
 勿々他人の及ぶ所よあらずと主膳伊左衛門も感心して暫
 く此所よどまりける然るも或日宿直之助殿温泉の中よ
 て類よ胸あしく嘔吐しけるが數塊の虫腹中より出て熱湯
 の中をうけ歩行事魚の水を游ぐ如く湯の本を慕ひ何國と
 もなく失ふけり是より顔色日々美麗く二三日の中よ元
 の窈窕たる貞さ成ければ姫の悦び大方ならず是偏へよ日
 金の地蔵尊の靈驗ありと彌々信心怠りなく今の氣力も日
 頃よ十倍し中納言殿も厚く事へ給へば主膳悦びの餘り最
 早瀬疾歩全快の上ハ一日も早く大和へ伊國ありて伊國
 親も伊對面然るべしと勸るは宿直之助殿も汝が如く一

日も早く伊對面度り思へども四五年来漂泊して國の様
 子さへしらねば汝一人國へ歸り迎の者を遣すべしと云ひ
 ければ主膳の旅の用意して大和をさして登りける

○雷電源八高家橋よて母の仇を復す事

斯ども知らず雷電源八の長崎の角力よて多くの金銀を賞
 ひ勇み進んで浪花へ歸り先八十島吉平が方へ来りければ
 思ひ懸なく吉平方よ伊左衛門の倅伊太郎居けるゆゑ源八
 大み不審して其来由を尋るよ吉平涙を流し老母の乞食と
 成此子を伴ひ勝曼坂よて袖乞して居けるを阿波大盡夕霧
 を手入ん謀計よて三上山よ云付此子を奪ひ立退ゆる老
 母遣じと止るを蹴殺し夫より斯様ノノの事よて我方に預
 り置しと落もなく語りければ源八の天よあくぐれ地み伏
 して母の死を悲しみけるが大脇差を引提りけ出すを八十
 島引留汝氣色をうへ何國へ行と問うければ源八涙を拂ひ
 いふよ及六百々右衛門を寸断し切さいなみ母の敵を取
 んと思ふなりといひければ八十嶋打鬨き尤もなりまうし

母を殺せしといふ證據なくして今行々右衛門を殺して
 も解死人となり命を取れんさそれの詮詰り何者ケし
 て中納言殿の輪落の誰させ申急所よあらず心を静よとい
 ふよ源八此一言よ心を痛め差俯よみて在ければ八十島打
 笑ひ篤と心を静なば是より直高家橋の方へ行べし今宵
 三上山の高家橋の邊よ用事ありて弟子を引連行しと
 聞たり急げといふよ源八不審して唯今證據なくして
 人殺しと成とて止め今又心を静たらば急げといひいな
 る仔細ぞやと云ければ八十島又曰我も跡より追付力を添
 ん初の儘よいで行なべ心せく借過ちあらんと思ひて斯の
 止しなり人の斯様の時心を静されば仕損する事あるもの
 なり最早汝が顔色常の通りよ成たれば氣遣なし急げく
 と追立てけるは流石名あふ取取なり夫より源八の草駄天
 走り高家橋よ来り様子を見よふ最早用事も果たりと見
 えて酒酌りつし夜も更たればいざ歸らんと三上山を離し
 て弟子鏡山湖愛知川草津山何も近江の邊よて力立する

僕どもなり鳴戸岩荒五郎を先立せや〜と橋へ來掛るを源八橋の真中にて如何三上山先日合判が注して我母を殺したる事覺えあらん雷電源八とくより愛み待受たり尋常は勝負せよと呼われ三上山のひろりと見やり雷電の長崎よりいつ歸りし我生れ付て小氣者よて人を殺そなき、いふ事生涯愛えなし人違ひなるべしと空囃ひて相手ふならねば卑怯なり小兒を奪ひ取んため邪魔なる母を殺せし事相違なし立上つて勝負〜と詰寄をも汝如何様いふども知ぬ事知ぬなり證據あらば出すべし其ときハ男なり勝負してとらせんと立會氣色あらざれば源八も證據困り如何せんと躊躇所其證據是ありと伊太郎を抱き八十島吉平橋詰仁王の如くつゝ立たり三上山伊太郎を見て大仰天し日外責殺せし小悴此所ありとハ扱ハ此小兒め少喋りしならん最早百年目相手よなつて吳ん皆の者ども源八めを打殺せと皆々大脇差引拔穂先を揃へ切て斯るを五人を相手よ大わらハ成て戦ふ有様ハ

目覺しうりける次第なり先進む鏡山を真ニツツ切倒し返す刀は湖の腰のつぐひを切離され橋より下へのたりける愛知川草津山物をも言す双方より切付るを早足の源八二間計り跡へ飛送れば相打も成て倒れける是を見て荒五郎叶之じとや思ひけん逸足出して遊行を八十島吉平小兒を抱ながら鷲の小鳥を掴むが如く片手引提げ手早繩とを懸よける三上山百々右衛門の橋もたれ煙草を吞てありける源八が働きを見て公家侍士の中問め餘程あちをやる某しが引導して閻魔の廳へ送り遣ハさんと三尺計りの大脇差引抜己ハ角力の意趣もあり幸ひの所なりいざ参るといふより電光の如く飛懸れば心得たりと互に浪花の關と關火花を散して戦ひける源八ハ一心親の敵と思ひ詰踏込〜切付ればさしもの三上山あしらひ兼逸出を向ふハ八十島吉平力士の如くつゝ立て〜二すも通すまじと大手を廣げ待りくれ〜時々右衛門刀法乱れ大抵二ヶ所受たなる所を疊りけ〜速お切伏留をさ

しける此騒動は雨町より梯子を持出往來を塞ぎ源八を生捕んと縛くを八十島盛りけは親の敵打なるを楚忍し給ふなどいふ所へ早處の縣令組子數多召連召捕向ハ源八八十島詞を揃へ是ハ親の敵打ふはと高らうよ名乗けれハ縣令詞を改め親の敵打ふもせよ汝等ハ町人ならずや吟味濟までハ細掛れとありけるゆゑ源八利ハ伏し尋常ハ腕を廻しけれハ組子高手小手ハ縛めける縣令死骸を一々見分るよ三上山ハ懷中より五百兩の質札ハ公任直筆の歌仙の色紙とあり源八見るより大驚き其色紙ゆる主人ハ意流の身となりしなり扱々能物を見出たり何とぞ見せ下されよと提灯の明りよて篤と見て此質札ハ枕久の二字をすゑし印判あるハ正しく枕屋久兵衛方ハ色紙ハあるベし心せく儘三上山ハ留をさし詮議の種を失ふたりと大お歡けハ八十島聲りけ源八歡く事なり斯る事も有んりと三上山ハ弟子鳴戸岩を生捕置たりと檢使の前ハ引出し何分此者を拷問遊されハハ委細相分りヤべしといふハ縣

令も八十島を稱し汝ハ働きた天晴なり源八ハ事ハ心に懸る事なりれとある源八悦び某ハ斯ハ眼目ハ逢ふてある上ハ八十島何卒我變り伊豆の國へ立越色紙ハイ月しれたるよし中納言殿へしらせてたべと問より吉平打點ハ汝ハ心を勞る事なりれ是より此子を宿し殘し伊豆國へ赴き吉左右を知らせんと勇み立ハ縣令ハ源八鳴戸岩を引立双方へ別れける

○八十島吉平伊豆國へ赴く事

井中納言殿は歸洛宿直之助伊國姫婚姻の事

夫より八十島吉平ハ伊太郎を宿し殘し草駄天の如く晝夜の別なく伊豆國へ來り源八ハ三上山を殺し公任卿の色紙の有所枕久方ハあるよし委しく語りければ井中納言殿の悦び宿直之助右京之進も稀洛の稱こそ出來たれと勇立ハ伊左衛門枕久ハ某し久しき朋友なれば色紙さへあるならば早速手ハ入ヤべしと八十島同道して浪花へ歸るハ藤屋の妙閑も次第ハ老衰すれば一人ハ伊左衛門なれば勘當をゆ

るさんと番頭忠左衛門云付所々尋し所此程の伊豆ありと聞て忠左衛門旅の用意して立出るよ水口の宿まで八十嶋伊左衛門の出會大に悦び勘當の詫相叶ひ迎ひお來りたりと互に無事を語り夫より浪花へ立歸り母を面會して夕霧が忠孝子でなしたる事を語りけるお母も其真心を感し早々孫お逢べしと八十島方より連來り一目見るよ伊左衛門お生寫しおて其發明なる事幼少の子の及ぶ所よあらねバ大に悦び妙閑の片時も傍を離さず寵愛一方からず伊左衛門の母お金子五百兩あらバ枕久よ是を渡し公任の色紙を取返し中納言殿の歸洛を願たしといふよ母も夕霧が貞節伊左衛門も伊豆ありて世話おなりし事を思ひ金五百兩渡し直に枕久方へ行て色紙の始末を語り金を出すよ久兵衛色を失ひ斯る盗み物ともえらバ阿波大盡家の重寶といふお寶と思ひ質し取たり金子一よ及ばずと金をも取らで色紙を返しけれバ伊左衛門の將軍家へ色紙を持参し鶴塚荒五郎が盗し段々上則ち荒五郎の縣令所よ召

捕れ罷り有よし訴へけれバ將軍家より下知有て荒五郎源八を召連來るべしと早速召呼れ荒五郎を段々と拷問あるお三上山よ色紙と盗ませ宿直之助と毒藥よて頼病となしたる事をも夕霧を手に入んと三上山よ言付源八の母をも殺させしよし一々白状お及びけれバ源八の親の敵討に相違なけれバ早速救免あり荒五郎事ハ重罪逃れがたく去バり首よぞ所せられける將軍家より禁庭へ色紙を差上られ櫻井中納言の歸洛を願はれるよ帝御威有て中納言殿早速歸洛仰せ付られけれバ再び花咲春お逢心地して熱海より歸洛し給へバ宿直之助殿よい主膳早速大和へ立歸り病氣平癒のよし仁主人道おゆけれバ早速迎ひの大勢よ主膳を差添誠よ目を驚らす行列おて目出度國人あり親子久々の對面有しお伊左衛門も早速大和へ來り宿直之助殿の痲疾ハ全く荒五郎が毒藥を以て討ひし旨白し給へり上しは將軍も久々對面なし給へされバ早速呼出され五六

年訂國修行之事をも聞たまひ浮園姫が貞節を感し改めて將軍家の伊媒あて櫻井家より大和へ將軍家の願々差添られ婚姻ありけれバ仁圭の説び大りたならバ千代八千代と契りける宿直之助ハ右京之進々深切の取計ひをことよ嬉しく思ひ屋屋より夕霧と受出し宿直之助の媒あて再び伊左衛門よ婚姻なさしめ給へ母妙閑も夕霧が貞節と聞て書替し似多の事を大に恥いと睦まじく暮し孫伊太郎が發明を悦びける中納言殿の廢宅ハ筒井家藤屋伊左衛門より普請をなし誠よめざしき普請おて萬事心の儘よ暮し給ひける藤屋伊左衛門の家業を嫌ひ悴伊太郎に家督を譲り夕霧諸とも伊豆の國熱海おて中納言殿の廢宅を修理し引移温泉を樂しみ一生閑居よ暮しけるこそ目出たけれ

夕霧廊文章畢

古今大岡仁政錄

村井長庵記	上	二冊	同	定價金四十錢
越後吉傳記	上	二冊	同	定價金四十錢
松田重四郎記	上	二冊	同	定價金四十錢
小問物屋兵衛傳	上	二冊	同	定價金四十錢
白子屋阿熊記	上	二冊	同	定價金四十錢
鈴川源九郎記	上	二冊	同	定價金四十錢
水村九助傳	上	二冊	同	定價金四十錢
鯨論裁許卷	上	二冊	同	定價金四十錢
雲切仁左衛門記	全	一冊	同	定價金四十錢
安藤小次郎傳	全	一冊	同	定價金四十錢
後藤半四郎傳	全	一冊	同	定價金四十錢
花咲屋藤三郎記	全	一冊	同	定價金四十錢
右の史とも世に有名なる大岡越前守忠相殿勤役中數多裁許の中最も面白き事人意外に出し明斷を著つりて勲善惡を明了し給へり婦女子方の浮心得よも成べき冊紙なれバ何卒愛看あらん事を希ふ	全	一冊	同	定價金四十錢

編輯人不詳
東京深川區富岡門前東仲町十六番地
東京府平民
出版人 廣岡幸助
發行所 東京橋區三十間堀二丁目一番地
社主 山内文三 泉社

東京圖書館

和書門

類

一函

八架

九

四號

一冊